



新年のご挨拶

～地域医療を支え世界に羽ばたく
“グローバル”な奈良医大を目指して～

理事長・学長 吉岡 章



明けましておめでとうございます。法人化して満6年が経ちました。新年にあたり、まず、第1期(H19～24年度)を振り返り、次いで、第2期中期目標・計画期間(H25～30年度)の取り組みについて述べます。

法人化改革は、財政運営の独立と責任体制の明確化をもたらしました。大学・病院の経営と運営の意思決定機関が役員会になったことで、スピード感も出て来ました。その結果として、全ての指標が右肩上がりとなりました。この6年間で財政規模は約300億円から400億円へと急成長し、県からの運営費交付金が不十分なか、最初の3年間の累積赤字(18億円)は後半の単年度黒字化で半減しました。これは個々の教職員の意識改革、精励、加えて日々の経営・運営の努力が実を結んだものと厚く御礼申し上げます。

■教育と医師・看護師の育成について

これは最重要使命です。医学科入学定員を95名から113名へと増員し(H22)、文科省の教育GPの採択を得て地域基盤型医療教育コースを設置し、地域枠の他緊急医師確保枠や、医師確保研修学修奨励学生も採用することで、着実に地域医療に貢献する人材育成が進行・配置中です。将来の基礎医学者・社会医学者の育成を目指して早稲田大学・関西医科大学とのコンソーシアムの下、公立大学初の研究医枠(2名)で編入学生を受入れています(H24)。

看護学科の定員を80人から85人に増員し(H24)、大学院修士課程を開設して(H24)、看護師教育充実に努めています。

■研究の推進と国内・国外機関との連携・交流について

外部競争資金の獲得に努め、科学研究費の採択件数・金額は平成18年度の61.5%増・50.6%増となりました。また、産学官連携推進センター(H23)、女性研究者支援センター(H22)、なかよし保育園改築拡充(H24)、寄附講座(住居医学、血栓制御医学、血圧制御学、人工関節・骨軟骨再生医学、スポーツ医学)と県補助金講座(地域医療学、糖尿病講座)を設立し、研究・診療活動の実を上げています。

国際交流センターを設置(H21)し、Oxford大学(英)、Ruhr大学(独)、Chiang mai大学(タイ)、福建医科大学(中国)、早稲田大学、奈良先端科学技術大学院大学、同志社女子大学と協定を結び、実際に学生と教員が移動し合っています。

■先進的な医療の提供について

22診療科と中央診療部門(10部、14センター、4室)を中心に、県民のための先進的の最高医療機関として幅広いニーズに合った医療提供を行って来ました。総合周産期母子医療センターの充実の他、専門診療に特化し、利用者に分かり易くするべく、緩和ケア、腫瘍、リウマチ、糖尿病、ペイン、形成外科、小児の各センターや遺伝カウンセリング室、メディカルバースセンター、乳腺外来等をオープンして来ました。また、平成23年度には病院機能評価のVer.6認定を取得しました。

平成25年11月には、E病棟第1期工事が竣工、リニアック2台(1台は本邦第1号機)を稼働させると共に、がん診療に特化した医師を増員し、がん診療連携拠点病院としての強化を図つ

Contents

新年のご挨拶.....	1～2	■チェンマイ大学医学部長が本学を訪問されました／	
新病棟(E病棟)が一部オープン.....	2～3	■「まほろば研修会～仕事と家庭の両立～」[En女医Cafe]を開催しました／	
■叙勲受章者のお知らせ／■産科医療功労者厚生労働大臣表彰／		■平成25年度中島佐一学術研究奨励賞の募集.....	13
■「国際ソロプチミスト奈良-あすか」よりクラブ賞で表彰されました.....	4	■漢方薬シンポジウム2013を開催しました／	
■糖尿病学講座を開設しました／■先天性心疾患センターを開設しました.....	5	■第1回大和漢方医学薬学セミナーを開催しました.....	14
■医学科第2年次編入学試験入学宣誓式を行いました／■医学科第2年次編入学試験を実施します／■高大連携教育を推進しています.....	6	■産学官連携シンポジウムを開催しました／■奈良県立医科大学・同志社女子大学第7回シンポジウムを開催しました.....	15
■フィリピン共和国における台風被害に対する国際緊急援助隊医療チーム第1次隊に参加して／■平成25年度白檀生祭のご報告／		■平成25年度 外部資金獲得状況.....	16～18
■公衆衛生学会で看護学研究科大学院生が優秀賞を受賞しました.....	7	■特別支援学校生徒の職場実習を行いました／	
■本学初の医学科と看護学科の協力による学会運営を行いました／		■附属病院で中学生の職場体験学習を実施しました.....	19
■看護学科学者がクラブ活動で活躍～看護学科も頑張っています～.....	8	■院内コンサートを開催しました／■第1回在宅緩和ケア地域連携研修会(ケアカフェちゅうわ)を開催しました.....	20
■クラブ紹介.....	9	■パプアニューギニアでの医療ボランティア活動参加報告／	
■図書館だより.....	10	■ドクターカーへの看護師の同乗を開始しました.....	21
■産学官連携だより.....	11	■平成25年度奈良県在宅医療推進事業(多職種連携研修)に採択されました／■eラーニングを活用した看護技術教育を実施しています／	
■研究紹介.....	12	■平成25年度医学教育等関係業務功労者表彰.....	22
		■部門紹介(輸血部・A病棟6階北・A病棟7階北).....	23
		■総合防災訓練を実施しました／	
		■リレー・フォー・ライフ・ジャパン奈良に参加しました.....	24
		■公開講座『くらしと医学』開催のお知らせ／レポート.....	25
		■メディア掲載情報／下ツ道／広告.....	26

ていきます。

来年度の本学附属病院の臨床研修プログラムマッチング率は、56/57 (98%) と過去最高となり、奈良県下マッチング率も94/104 (94%) と全国第3位の高水準を維持しています。今後さらに後期研究医(専門医コース)への増加を図らねばなりません。

■地域医療貢献について

県民公開講座、かしはら健康サポーター養成講座、藤原京スタディ(地域健康医学講座)の他、震災・災害支援のDMATや学生ボランティア奈良Willも活躍しました。

このように、第1期中期計画は9項目のうち7項目が達成に向けて順調に進んでいる、また、2項目も概ね順調に進んでいると評価されました。

■第2期中期目標・計画について

第1期の成果を継承しつつ、今般、第2期中期計画を策定しました。私がかねてより本学の目指すところは「グローバル」であると考えています。これは、地域のために尽くし、働くという地域貢献を果たしながら、同時により広く社会、世界に羽ばたくと共にその成果を還元していくことであります。

計画は第1期と同じく大学の基本的な役割として「教育」「研究」「診療」「法人運営」の各要素を網羅し、懸案である教育・研究部門の現県農業総合センターへの移転(H33)や老朽施設の改築と共に、本学が果たすべき役割として、新たに「地域貢献」と「まちづくり」を明記し、県の支援の下、県内公立・公的病院等への医師配置・派遣、看護師の県内就職率向上を目指します。そのために県立医大医師派遣センターと県費奨学生配置センターを設置します。また、看護実践キャリア支援センターを立ち上げ、看護師の就労支援と認定・専門看護師の増員を図ります。

診療体制の充実としては、重篤な救急患者の受け入れ率が100%に近づけ、病院全体・地域全体として断らない救急医療の実現に取り組んでいきます。また、総合周産期母子医療センターの機能充実も図り、施設間ネットワークの連携を図ることで新生児搬送受け入れ率100%を目指します。

■将来に向けて

本学の学生・医師は、極めて優秀な人材が多く、病院の経営状態も上位にランクされています。私は、20年先には本学は全国80医学部・医大のトップ10入りを目指すことを表明しました。ある分野、例えば血友病の研究や血栓症の研究では、ベルツ賞銀賞を受賞し、世界トップクラスの実績と能力を持つ研究者がいます。このように高度先進医学・医療の分野でも、地域医療でもトップレベルのロールモデル大学として、県民・国民のために貢献できる医科大学を目指していきたくと考えています。

全教職員がこの中期目標・中期計画の趣旨、内容を十分理解し、「グローバル」なマインドを持って、引き続き一丸となって中期計画達成に取り組んで行くことを要請します。

【第2期中期計画の概要】

<p>I 地域貢献</p> <p><教育関連></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 医師・看護師の県内就職率の向上、適切な医師派遣システムの確立 ● 地域の看護師のレベルアップ <p><研究関連></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究成果等の地域への還元 <p><診療関連></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 断らない救急医療体制の構築、周産期医療体制の強化 ● 他の医療機関との連携強化、県内医療人への助言・指導 <p>II 教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ● リベラルアーツ教育の実践、医の心をもった医療人育成、医療経営に関する教育の確保 ● 教育内容の評価 ● 新キャンパスへの教育部門の移転計画の推進 	<p>III 研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 研究の適切な成果評価 ● 有能な研究者の獲得、研究範囲の拡大 ● 新キャンパスへの研究部門の移転計画の推進 <p>IV 診療</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 医師・看護師等の離職防止 ● がん拠点病院としての機能の充実、治療成績・患者満足の一層の向上 ● 新外来棟への早期改築の立案、老朽・狭隘な臨床医学研究棟等の改築 <p>V まちづくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 教育・研究部門移転後の跡地活用 ● 「医科大学を中心としたまちづくり」への参画 <p>VI 法人運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ガバナンス体制の充実強化 ● ワークライフバランスの充実強化 ● 同窓会・歴代卒業生との連携、繰越欠損金の解消 など
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

新病棟(E病棟)が一部オープン

E病棟第一期工事竣工に際して

病院長 古家 仁

現在奈良医大では大きな病棟の工事が行われています。その病棟は単に入院だけでなく、多機能を備えた病棟であり、周産期医療とがん医療に特化しているといっても過言ではありません。従来は中央手術棟(仮称)と呼称されていましたが、本学に以前から存在するA棟、B棟などとの整合性からE棟と呼ぶということで周知されました。ちなみにA棟は2階までが外来、3階が手術室、4階から上が病棟、B、C棟は2階までが検査部門、3階が手術室とICU、4階から上が病棟、D棟は精神医療総合センターとなっています。

E棟は2期に分けて工事が進んでおり、先日第一期が終了し現在第二期工事が始まっています。E棟の地階部分は、がんに対する治療を行うゾーンで、放射線治療のためのリアックとして現在日本でも最新式のバリアン社製 Trilogy と TrueBeam が各1台、2期工事で TrueBeam1台、PETが1台入ります。奈良県だけでなく近畿圏における放射線治療の中心になります。

1階には化学療法室が広い面積を確保して整いました。多くの外来患者さんがここで抗がん剤の点滴投与などをうけます。またリハビリセンターも充実し、運動器、呼吸器、脳血管疾患等リハビリテーションだけでなく、心大血管やがん患者、早期リハビリテーションなども積極的に実施していく予定です。

2階には最新式の検査機器を備えた検査室が充実し、緩和ケアセンターは現在の機能を充実させ、奈良県内における緩和ケアの中心となって活動できるような体制になります。

3階は手術室です。12室を新規に増築する予定です。汎用手術室を基本とし、どの科の患者さんでもどの部屋でも手術できるというコンセプトで整備され、また麻酔科医、看護師、その他のメディカルスタッフがすぐに対応できるように中央に管理区域を設けました。手術室内には、ロボット手術対応の手術室、血管造影をしながら大きな手術が可能なハイブリット手術室など設備面

でも最新式です。また一定性をとり入れ、患者さんは病棟から歩行あるいはベッドで各手術室の前までやってきます。術後は病棟のベッドが各手術室の前まで入り、何回もベッドの移行をせずに病棟に帰すことができます。

4階はNICU、GCUの病棟で、奈良県内の新生児医療の中心として活動することになります。

5階は、MFICU、産科病棟で、重症妊婦の受け入れを積極的に行います。

6階は、バースセンター、婦人科病棟で、バースセンターでは一般の分娩も可能です。婦人科病棟では現在と同様婦人科疾患に対する先進的な治療が行われます。

7階は、小児センターで、奈良県内における小児疾患の中心として活動します。

以上のように病棟部分は高度な周産期医療が可能となるように設計されています。さらにこういった病棟機能に加えて、患者アメニティの向上を目的とした整備、例えばエスカレーターの設置も検討しています。基本は、奈良医大にやってきた患者さんが満足して診療を受けることができる病院、これを目指しています。



テープカットの様子

新病棟 (E 病棟) 第一期部分概要

平成 23 年 3 月より (仮称) 中央手術棟として整備を進めてきました新病棟 (E 病棟) の I 期部分が完成しました。診療を始めたのは、放射線治療、腫瘍センター (外来化学療法室) のがん治療部門と臨床検査室です。

放射線治療部門 (地下1階)

■ 放射線治療室 (3室)、治療計画用 CT 室、診察室 (3室)



最新の放射線治療装置 (リニアック) 2 台が導入されました。1 台は 11 月から稼働を開始しています。もう 1 台 (True Beam STX) は、我が国初の最新鋭機で、現在スタッフの方々による調整作業が続けられており、1 月より稼働開始の予定です。



新しい装置では、複雑な形状の腫瘍にもこれまで以上に高い精度で照射が可能、また呼吸による動きのある部位にも効率的な照射が可能となるということです。

腫瘍センター (外来化学療法部門: 1階)

■ 外来化学療法室 (26床+小児コーナー) ■ 診察室 (2室)、処置室、ミキシング室



移転前は 14 床であった化学療法室が充実しました。広いフロアにゆったりと治療用リクライニングチェア等を設置しています。



抗がん剤の投与には時間がかかりますので、できるだけ寛ぎながら治療に専念できるように、天井には専用のスピーカーを設置し、BGM を流しています。各チェアには卓上テレビも設置しています。

臨床検査部門 (2階)



中検棟の 2 階、3 階にあった生化学検査室や微生物検査室が移転しました。移転を機に最新の自動分析装置等を導入しています。



これにより、短時間で多くの検査が実施可能になり、当日採血の結果も迅速に患者さんにお伝えできるようになりました。

微生物検査室内には県内唯一の BSL3 ルームも整備され、これまで以上に安全な環境で検査ができるようになりました。

E 病棟全体のフロア構成

	I 期エリア	II 期エリア
7 階	小児センター	
6 階	メディカルバースセンター、婦人科病棟	
5 階	総合周産期母子医療センター (MFICU)、産科病棟	
4 階	総合周産期母子医療センター (NICU、GCU)	
3 階	中央手術部	
2 階	中央臨床検査部	リハビリテーション部
1 階	腫瘍センター	RI 検査、緩和ケア外来、がん相談
B1 階	放射線治療部門	PET-CT

※太字 (網掛け部分) が今回オープンした部門 3 階以上は、平成 28 年 3 月に竣工予定です。

▼これからの工程

【平成 25 年度】

解体工事 (中検棟、旧がんセンター棟)、
基礎工事

【平成 26 年度】

埋蔵文化財発掘調査、基礎工事、躯体工事

【平成 27 年度】

躯体工事、外壁工事、内装工事
→平成 28 年 3 月竣工 (予定)

叙勲受章者のお知らせ～心からお祝い申し上げます～

叙勲は、国家又は公共のために功労のあった方を対象に授与されています。

去る、11月3日に平成25年秋の受章者の発令があり前看護師長の善家 トシコ氏が受章されました。

心からお祝い申し上げます。

■ 瑞宝単光章 善家 トシコ 氏 (前看護師長)

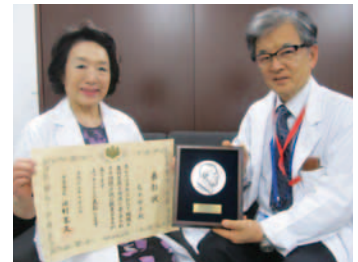
産科医療功労者厚生労働大臣表彰

女性専用外来 島本 郁子

2013年10月2日に厚生労働省講堂において産科医療功労者厚生労働大臣表彰を受けました。これは多年にわたり地域の産科医療に従事し、産科医療の確保、推進に貢献した医師に対する表彰です。

1960年に奈良医大を卒業後、産婦人科学教室に所属してはや「半世紀」を越えました。その間、阪大微研、テキサス大学の産婦人科で働いたこともありますが、私は人生の大半を奈良医大で、母と子の周産期医療を中心とした臨床と研究に没頭して生きてきました。2000年に定年を迎えるまでの5年間は、看護短期大学部で教授として産科学と母性看護を担当し、その後も県内の短大で助産師教育に携わりました。

2005年から県の女性健康施策の一環として、奈良医大に設置された女性専用外来を担当して9年目になります。この外来は性差医療の観点から、女性特有の症状に対応するものであり、本年11月までで延べ3043名、実人数531名が受診してきました。女性医師として健康上の悩みを聞き、必要に応じて専門診療科につなげる役割を果たすために、院長をはじめ各診療科の先生方の強力なバックアップを頂いていることに心から感謝申し上げます。



古家病院長に受賞を報告された島本郁子先生

(研究推進課)

「国際ソロプチミスト奈良-あすか」よりクラブ賞で表彰されました

地域健康医学教室 講師 岡本 希

国際ソロプチミストは、世界124カ国に3,100以上のクラブ、約89,000人の会員をもつ世界最大の奉仕団体です。種々の奉仕活動の中に、研究への支援事業、社会人や学生のボランティア活動への顕彰事業などがあります。ソロプチミスト日本財団女性研究者賞の応募について、ソロプチミスト日本財団委員会委員長の田中郁子氏（本学経営審議会委員、株式会社柿の葉すし本舗たなか代表取締役社長）より吉岡学長先生にお話があり、女性研究者支援センター特任教授の御輿先生と地域健康医学教室の車谷教授の推薦を受け、女性研究者賞に応募いたしました。残念ながら、この女性研究者賞の受賞には至りませんでした。私たちの教室が進めております「藤原京スタディ」に対して、国際ソロプチミスト奈良-あすかよりクラブ賞をいただくことになりました。大変嬉しく思います。

藤原京スタディは、高齢期における生活の質（QOL）および生活機能に影響を及ぼす要因を解明することを目的に平成18年から開始した前向きコホート研究です。ベースライン対象者数は4427名で、地域在住の高齢者を対象と

したコホート研究としては国内外をみても規模の大きいものと言えます。平成24年の健診では、約2,800名の方から遺伝子解析研究の同意をいただきました。研究メンバーには、本学の眼科、第二内科、泌尿器科、精神科、整形外科、看護学科の先生、近畿大学医学部や帝塚山大学の先生も参加していただいています。遺伝子解析では本学生化学教室の先生方にお世話になっております。藤原京スタディの中の私の研究分野は、健康関連QOL調査票の開発や、認知機能障害の介入可能な危険因子を検討することなどです。

藤原京スタディでは、簡易調査と総合健診を取り入れて、今後20年間の継続を目標としています。藤原京スタディを通して、高齢者の健康寿命延伸のための予防対策を発信していくことができればと思います。これからも皆様の温かいご支援をお願い申し上げます。



表彰された岡本講師（右）と所属長の車谷教授

糖尿病学講座を開設しました

奈良県と公立大学法人奈良県立医科大学は、平成 25 年 10 月から糖尿病に関する教育研究を推進し、奈良県の糖尿病診療の質の向上に資することを目的として、奈良県立医科大学に「糖尿病学講座」を開設することになりました。

糖尿病はさまざまな慢性合併症を引き起こす可能性があり、その発症や進展を抑制することは県民の健康度を向上させることとなります。しかしながら、これまで奈良県の糖尿病診療力は十分ではありませんでした。

そこで、奈良県立医科大学が中核となって、県内の医家と協力しながらその責務を果たす必要がありました。このため平成 23 年からは糖尿病センターとしての診療を行ってまいりました。一方、行政の面からも適正な糖尿病診療体制を早期に確立することが必要でした。両者の認識が合致したことから、この度「糖尿病学講座」を開設の運びとなりました。

糖尿病学講座がめざすところを以下に掲げます。

- 糖尿病診療に携わる人材の育成：専門医、認定看護師、糖尿病療養指導士、および糖尿病診療に精通した医療者の育成。
- かかりつけ医との地域連携診療のシステム作りと診療支援：受診率の向上、受診中断率の低下、慢性合併症の進展阻止あるいは抑制を目指した診療システムの確立。
- 糖尿病患者の生活習慣修正や療養継続への支援とその方法の普及。
- 学生、研修医への指導：専門分野に関わらず標準糖尿病治療法を習得。
- 病をもつひとと医療者の関わり方の研究：病を持ちながらよりよい生活の質を保つ医療の探求。

糖尿病の治療はほぼすべての診療科との連携が必要となります。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。なお、診療に関しましてはこれまで通り、院内協力を得ながら糖尿病センターで実施いたします。

『糖尿病学講座 教授就任 ご挨拶』

糖尿病学講座 教授 石井 均



このたび平成 25 年 10 月 1 日付けで糖尿病学講座教授に任命されました石井 均でございます。大学院終了後、天理よろづ相談所病院で 30 年間、糖尿病をもつ方々の治療に従事してまいりました。

糖尿病は通常一生付き合っていく慢性疾患であり、急性疾患の治療を目標とした従来の医療とは異なる特徴を持っております。一言でいえば糖尿病を持つ人（患者）の治療への積極的／自律的参加が不可欠であるという点です。医療者がどのように関われば、患者さんは主体的に自らの課題に取り組むようになるのか？病気だけを対象としていたのではその道は見えてきません。糖尿病を持つひとに関わっていくことが必要です。

私は、平成 5 年にハーバード大学ジョスリン糖尿病センターメンタルヘルスユニットで糖尿病患者の心理的ケアを学び、日本でその重要性を提唱してまいりました。その後、河合隼雄文化庁長官との出会いを通じて、治療場面での医療者と患者さんの関係を重視した「糖尿病医療学」の確立に取り組んでまいりました。

新しく誕生した糖尿病学講座におきましては、“糖尿病を持つ人たちを心身両面から支える医療”という理念のもと、糖尿病診療に関わる人材の育成、かかりつけ医との連携、などを推進してまいりたいと考えております。少人数での船出ではありますが、これまで糖尿病治療を担当していただいた方々と力を合わせて進んでいきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

先天性心疾患センターを開設しました

10 月 1 日から附属病院中央診療施設の一つとして先天性心疾患センターを設置しました。

先天性心疾患とは生まれつき心臓や血管のかたちが正常とは違う病気で、100 人に 1 人の割合で生まれてきます。また先天性心疾患は小児の疾患と考えられていましたが手術成績の向上に伴って長期生存が得られるようになった結果、現在では成人の先天性心疾患患者が増えてきています。また、小児期にはわからなかったものが成人になってから顕在化する場合があります。今後も成人の先天性心疾患患者は増加していく見込みです。奈良県においては小児・成人とも先天性疾患の診療に携わる医師の数は十分ではありません。

こうした背景の中今後、先天性心疾患の診療・研究及び心臓形態学において本学が先駆的な役割を担うことを目指して、Royal Brompton & Harefield NHS Foundation Trust の上村秀樹氏を併任教授として迎えるとともに、先天性心疾患センターを立ち上げました。上村秀樹氏は先天性心疾患領域において数多くの手術実績と研究業績のある世界的にも著名な医師です。

ちなみに併任教授とは、他大学等で現在教授相当職にある方を本学の教授としても任用し、本学における教育・研究・診療の向上に力添えをいただくために新たに創設した制度です。

上村併任教授には今後奈良県立医科大学の教員の一人として、非常勤ではありますが先天性心疾患患者の手術・治療あたっていただくとともに、この領域における医師をめざす者の育成にご尽力いただきます。

『新風はロンドンから』

先天性心疾患センター 併任教授 上村 秀樹



平成 25 年 10 月 1 日付けで拝命しました。英国ロンドンの Royal Brompton & Harefield NHS Foundation Trust にて Consultant Cardiac Surgeon（日本でいう心臓外科部長に相当）の職にあります。170 年の歴史を有する同施設は、現在欧州最大の胸部疾患センターです。

先天性心疾患領域では、小児循環器疾患の診療にとどまらず、特に心臓形態学の啓蒙と成人先天性心疾患の診療・研究において世界の指導的立場にあります。こうした世界トップの知見と技術を、奈良県立医科大学を通して日本社会へ還元できることは大きな喜びです。また地域医療においても地道に貢献する所存です。私自身の累計 4 千例の心臓血管外科手術実績をふまえ、奈良の地に良いチームを醸成し、有能な若手を育てることを目指します。欧米の第一線で活動する知名度ある外科医を、併任教授という形で日本へ呼び戻す英断をされた首脳陣の方々のご期待に沿うよう、大きな視野に立って更に努力邁進して参ります。

医学科第2年次編入学試験入学宣誓式を行いました

平成25年6月22日(研究医養成コース)、23日(地域基盤型医療教育コース)にそれぞれ実施された編入学試験合格者3名の入学宣誓式が9月23日に吉岡学長、喜多医学部長、基礎医学教室各教授の出席により行われました。

研究医養成コースは、早稲田大学ならびに関西医科大学との連携協力を踏まえて早稲田大学先進理工学部の学生から奈良県立医科大学への編入学を希望する者から選抜され、在学中は、医学の勉学に励むと共に基礎医学系・社会医学系研究室でメンター実習等を行います。卒業後は、医師免許を取得するとともに、大学院医学研究科に進学して学位

を取得し、将来の基礎医学・社会医学研究者としての第一歩を踏み出していく予定です。

一方、地域基盤型医療教育コースは、卒業後は医師免許を取得し、前期臨床研修を終えた後の一定期間は、地域医療に貢献する医師として活躍することが期待されています。



入学宣誓式

医学科第2年次編入学試験を実施します

平成25年度は第2年次の9月に編入学をしていましたが、平成26年度から編入学時期が第2年次の4月に変更になります。これに合わせ、平成26年2月下旬に医学科第2年次編入学試験(県費奨学生枠)を実施し、1名の学生を募集します。本試験に合格した学生は4月から第2年次に編入学し、入学と同時に「奈良県医師確保研修学修資金」の貸与を受け、卒業後は同資金返還免除要件に従い、奈良県の地域医療に貢献することとなります。

基本的なカリキュラムは一般入学生と変わりませんが、編入学生は地域医療に貢献する医師としてのキャリアパスを構築するため、「教育開発センター」「地域医療学講座」の教員のもとで、定期的な面談等による指導、実習を行います。

医学部卒業後は医師免許を取得し、前期臨床研修を終えた後の一定期間は、奈良県内で医師として勤務する予定です。

高大連携教育を推進しています

本学では、高校生の理科に対する興味を高めるため、高校生を対象とした大学での講義、実習の体験的学習を行っています。

今回は10月25日に「カメの解剖」をテーマにして、本学の生物学実習室で開催し、畝傍高校の生徒21名が参加しました。当日は、神戸市立須磨海浜水族園の谷口真理研究員による、日本におけるアカミミガメの現状に関する講義の後、須磨海浜水族園から提供いただいたカメの解剖を生物学教室教員3名、外部講師1名の指導のもと、行いました。高校生は普段の授業では体験できない実習に熱心に取り組みました。



実習の様子

カメの解剖をしてみて感じたことは、構造に少しの差はあるけれどヒトに似ているなということです。予想とちがったのは背骨のつくりで、解剖前は腹側の甲羅のすぐ内側にあるものと思っていました。実際は背側の甲羅と一体化していて驚きました。解剖の機会は今なかなかないので、参加できてよかったと思っています。ありがとうございました。

(男子Iくん)

僕はカメが好きで、学校で飼育しています。甲羅の中が想像できなかったので解剖してみたいと思い、実習に参加しました。解剖してみると、器官の間に膜が張りめぐらされていて、複雑でうまくできているなと思いました。肺に空気を入れ、膨らんだようすが印象的でした。実習を終えて、横で解剖していた友達が手を合わせて、カメに「ありがとう」と言っていました。

(男子Tくん)

私がこの実習で一番感じたことは命の尊さです。最初にカメの頸動脈を切って血を出しました。このカメの命が無駄にならないように、いろいろなことを学ばせてもらおうと気持ちを切り替えました。このような体験をさせてくれたカメたちに感謝し、これからの学習に生かしたいと思います。このような実習の機会を与您えさせていただいて、ありがとうございました。

(女子Aさん)



実習終了後の集合写真

フィリピン共和国における台風被害に対する国際緊急援助隊医療チーム第1次隊に参加して

医学科3年生 中務 智彰

日本政府が派遣する国際緊急援助隊医療チームに医療調整員として11月11日(月)から24日(日)までの2週間参加しました。レイテ島の州都タクロバンに診療活動の拠点をおき、1次隊として15日からの8日間で約800名の診療を行いました。

医療チームは民間の医師、看護師、薬剤師、X線技師、臨床検査技師、医療調整員、業務調整員の約25名からなり、私は医療調整員として受付業務、臨床検査補助、X線撮影補助などを担当しました。

電気、ガス、水道は全て止まっており、食事は缶詰とカップラーメンやレトルトの白飯、宿泊はテント、シャワーはな

く井戸水をかぶるといったもので、連日の30℃を超える気温と直射日光、昼夜を問わず1日数回降るスコールも活動に影響を及ぼしました。

これまでの2年半の学生生活で医療英語、基礎医学などを学び、地域の診療所で実習も受けましたが、これらを今回の派遣で活かすことができました。大学関係者、友人など多くの方の協力をいただきながら活動できているということを強く感じており、この場を借りて御礼申し上げます。



現地での受付業務

平成25年度白檀生祭のご報告

白檀生祭実行委員長 若林 拓也(医学科5年生)

今年も例年同様秋晴れの心地よい十月末に、平成25年度奈良県立医科大学白檀生祭を開催させていただくことができました。今年の白檀生祭のテーマは「いつ奈良医大に行くか? 今でしょ!!」です。今年の白檀生祭の新しい試みとして、ミニオープンキャンパスと称して大学祭とオープンキャンパスを同時に開催いたしました。学生またそのご家族の方々にも気軽に白檀生祭に遊びに来ていただき、奈良県立医科大学の雰囲気に触れていただければとの思いで決めたテーマです。今年の白檀生祭は台風の直撃に遭い、一日のみの開催となりましたが、幸いにも開催日は晴天に恵まれ、学生をはじめ学外からも多くの方々にお越しいただき大いに盛り上がりました。

近年の白檀生祭は医学的な側面にも力を入れており、医科大学にふさわしい大学祭をつくらうと努めております。今年は日程上開催することはできませんでしたが、毎年「Skills-lab」と称して、機器を使った検査や外科的手技を一般の方にも体験していただく展示コーナーも用意しています。体験内容としては、縫合、結紮、ガウンテクニック、エコー、採血、気管挿管、聴診、点滴などがあり、毎年多くの方からご好評いただいております。またシンポジウムは台風による直前の日程変更にも関わらず、先生方にご調整いただきまして開催することができました。今年のシンポジウムは、「これからの再生医療～ほしい組織をつくる～」がテーマでした。iPS

細胞を使用するのかなど、腫瘍化の問題、法整備、というように多角的な内容のシンポジウムとなり、再生医療に興味のある方や研究者を目指す学生など、参加して頂いた方にとっては大変有意義な時間となったと思います。

また「玉木宏トークショー」は大学の体育館に1200人を超える観客が集まって賑わい、大盛況に終わることができました。メインステージでの企画も大いに盛り上がり、今年は学外からの方々、おじいちゃんおばあちゃん、親御さんの姿も多く見受けられたように感じました。会場では模擬店も出店しており、例年以上に活気を帯びていました。

最後になりましたが、今年度も奈良県立医科大学白檀生祭を開催するにあたりご協力くださった、同窓会、大学当局及び関係者様各位、並びに多くのアドバイスをくださった諸先輩方にこの場をお借りして実行委員一同より厚く御礼申し上げます。ご協力いただきまして本当にありがとうございます。これからも白檀生祭をよろしく願いいたします。



ミニオープンキャンパス入試相談コーナー



メインステージ

奈良県公衆衛生学会で看護学研究科大学院生が優秀賞を受賞しました

看護学研究科 修士課程2年生 鳥塚 亜希

平成25年11月14日(木)に奈良県医師会館で開催されました第34回奈良県公衆衛生学会に発表しました「認知機能低下傾向にある在宅高齢者への心理的ケアに関する研究～懐メロを用いた回想法の評価～」で、優秀賞を頂きました。本研究は、奈良医大と明日香村の地域医療連携事業の精神看護学領域担当として、平成24年度から3年計画で行ってまいります認知機能低下防止とサクセスフル・エイジングのサポートに関する研究の一環です。

音楽は深い情動を揺り動かし、懐メロは高齢者の過去の自然な追想を興させ、回想法は心理的安定や人生の統合を促進させるなどの心理療法的効果があると言われており、懐メロを用いた回想法は、高齢者の心理的ケアと認知機能低下防止を目的としています。その効果を明らかにするために認知機

能、うつ、主観的幸福感、主観的健康感などを計る5つの尺度と生活機能評価基本チェックリスト(鈴木、2009)を用い、介入前後の変化を評価しました。その結果、認知機能と主観的健康観が改善したことが示されました。今後は、懐メロを用いた回想法の効果をより明確にし、サクセスフル・エイジングの支援方法の確立を目指します。

受賞メンバー(精神看護学)
(右から)
軸丸清子教授、
修士2年生鈴木佑典、
修士2年生鳥塚亜希、
上平悦子准教授、
橋本顕子講師



本学初の医学科と看護学科の協力による学会を開催します

整形外科学 教授 田中 康仁
成人看護学 教授 石澤 美保子

来る3月7日(金)、8日(土)に第12回日本フットケア学会学術集会在、「なら100年会館」と「ホテル日航奈良」で開催されます。本学術集会の会長に整形外科学・田中康仁、副会長に成人看護学・石澤美保子がその大役を仰せつかりました。全国規模の学会では本学初と言われています。本会は例年2,000名近くの足病変にかかわる予防的、治療的管理に係るあらゆる職種で構成されている多職種が集う学術集会です。

日本フットケア学会の会員構成の特徴は、医学では整形外科、内科、皮膚科、形成外科、血管外科、放射線科、血液透析科等の複数の診療科医師、看護では看護職だけでなく高齢者施設に勤務する介護職、また理学療法士や義肢装具士、そして基礎系研究者など文字どおり多職種が属しています。

この度初めて整形外科医(田中)が学術集会の会長となり、フットケアを足の機能面から捉え、治療的戦略だけでなく機能靴下や靴、子どもの足の健やかな成長のために取り組むべきことなど、日常的にも興味深いさまざまな切り口からセッションの構成をしています。そこに副会長である創傷管理を専門とする皮膚・排泄ケア認定看護師(石澤)が、足病変患者に対する創傷被覆剤に関連した治療的スキンケアにフォーカスし、看護理工学の視点からの研究、チーム医療に不可欠な各施設の看護師の役割についてのセッションなどを展開しています。また本学からも多くの先生方

にプログラムに参画していただいております、この場をお借りして心から御礼申し上げます。

今後本学の中・長期計画に掲げているような全国上位の医科大学を目指すべく発展を遂げていくためには、附属病院のさらなるチーム医療の推進がますます重要になってくると考えます。本学の医学科と看護学科の協力による初の学会運営は、これからの奈良県立医科大学ひいては奈良県下の医療施設に大きなインパクトを与えられると考えています。

せっかくの機会ですので、奈良県立医科大学所属の職員ならびに学生の方は、学会参加費(医師15,000円、医師以外10,000円)を無料に致しました。ぜひ皆様方の多数のご参加をお待ちしております。



第12回日本フットケア学会のポスターを手に、整形外科学田中教授(右)と成人看護学石澤教授(左)

【開催概要】

日 程：平成26年3月7日(金)・8日(土)

場 所：なら100年会館・ホテル日航奈良

学会HP：第12回日本フットケア学会

<http://12footcare.jtbcom.co.jp/outline.html>

奈良県立医科大学所属の職員ならびに学生は、参加費無料と致します。職員証、学生証を持参のうえ、ふるってご参加ください。

看護学科学生がクラブ活動で活躍～看護学科も頑張っています～

看護学科の学生は、西医体に参加することができませんが、西日本コメディカル学生大会や西日本看護学生大会(西看護体)、西日本医歯薬学生大会(西医歯薬)等に出場しています。また、医学科と看護学科との枠を超えて、練習では協力し合って、頑張っているクラブもあります。

平成25年秋季関西医学生空手道大会3位

看護学科3年生 勝村律子

平成25年秋季関西医学生空手道大会で、形の部第3位、組手の部第3位という成績を収めました。第16回西日本コメディカル学生空手道大会で第3位を収め、勢いに



乗って、今大会での5連覇を目指してきたため、今大会の成績については満足していません。次年度に向けて、3年生後期から始まっている半年間に及ぶ看護学実習という別の修行の合間に、練習時間を作って、より精進していきたいと思っております。

平成25年度秋季近畿医科学生卓球大会 女子団体戦準優勝

奈良県立医科大学Aチーム(団体チーム)

医学科6年生 福井 寛子、医学科4年生 北岡 淳子、

医学科3年生 羽根彩華

看護学科4年生 川上奈緒子、看護学科3年生 福山久美子

看護学科4年生 川上奈緒子

平成25年度秋季近畿医科学生卓球大会 女子団体戦準優勝という成績を収めました。私は最終学年である今年度が最後になるため、同じく看護学科の3年生福山とのダブルスで3位入賞を狙っていたので、残念な結果です。ぜひ、来年度も西医歯薬学生大会や春・秋の近畿大会に参加できるように、看護学科の新入部員を募集しています！



クラブ紹介



ダンス部

「have a PASSION for DANCING !」

部員 ▶ 20人以上

顧問 ▶ 大林千穂 (病理診断学教授)

キャプテン ▶ 辻本憲広 (医学科2年)

活動日 ▶ 不定期

私たちは奈良医大ダンス部「PASSION」です。現在1年生から4年生まで医学科・看護学科ともに仲良く活動しています。軽い運動程度に参加している部員もいれば、ストイックに毎日

練習に取り込む部員もいるなど、それぞれ自分のスタイルに合わせて活動しています。

練習場所は主に大学の大讲堂の2階フロアで、鏡張りで床もなめらかなとてもいい環境です。自分たちでお互いに教え合い、楽しく練習しています。練習場所が使えるときは自由に自主練習をすることもできます。

ダンスといっても色々なジャンルがありますが、ダンス部では部員それぞれの好みに合わせて JAZZ、LOCK、HIPHOP、BREAK、POP など様々なジャンルに挑戦しています。自分のジャンルが決まるまで自由にすべての練習に参加できますし、途中でジャンル変更をすることももちろん可能です。部員の多くが複数のジャンルに所属しています。

発表の場は学園祭やクラブ紹介のほか、他大学の学園祭、ダンスコンテスト、バトルイベントなどたくさんあります。その中でも一年でもっとも大きなイベントは学園祭です。部員一同この日に向けて意見を出し合い、楽しく作品を作っています。

ダンスは芸術でもあり、スポーツでもあります。音を身体で表現することは、何物にも代えがたく楽しいものです。これだけは他のクラブでは絶対に味わうことができないでしょう。

ダンスが好きな方や興味がある方は学年、学科を問わずいつでも新しい仲間を募集していますので気軽に声をかけて頂けると嬉しいです。

facebook ページ

→ <http://www.facebook.com/narmed.dance.passion>

奈良県立医科大学体育会サッカー部は、医学科、看護学科どちらからでも入部でき、部員数は1年5人、2年5人、3年4人、4年1人、5年4人、6年2人、マネージャー3人の計24人からなります。

練習場所は、夏場は大学のグラウンドが主ですが、冬場は日没が早いので、ナイター施設のある近くの中学校や市営のグラウンドを借りて、3時間ほど練習しています。毎週日曜日は練習試合をしています。試合後は試合のビデオを確認し、次に向けての改善点などを話し合います。サッカーはプレイ人数が11人と決まっているため、レギュラーを勝ち取るため、みな日々切磋琢磨しています。

奈良医大のサッカー部は他の大学のサッカー部に比べて部員数が少なく、できる練習メニューも限られてしまっていますが、その中でも効率的に練習できるように、準備にかかる時間を短くしたりするなどがなっています。また中学高校としっかりサッカーを経験していた人は少ないですが、優しい先輩やOBの先生の指導のもとみんなレベルアップしていきます。

サッカー部はサッカーだけでなく、練習後に先輩に食事に連れて行ってもらえたり、鍋パをしたり、飲みに行ったりと、プライベートの面でも充実した部活です。興味がある人はいつでも見学にきてください！



サッカー部

「一日一蹴」

部員 ▶ 24人

顧問 ▶ 斎藤 能彦 (内科学第一教授)

キャプテン ▶ 花房 龍太郎 (医学科4年)

活動日 ▶ 月、水、金、日 (週4回)

図書館だより

図書館利用の基礎知識

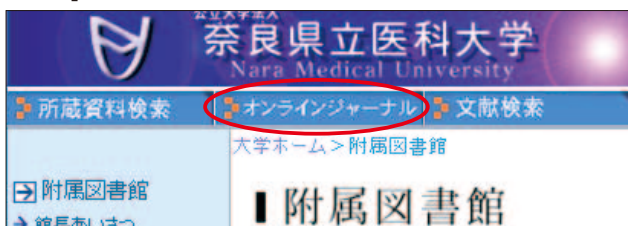
第4回 図書館の電子資料：電子ジャーナルのご紹介

●図書館には古い雑誌しかない!?

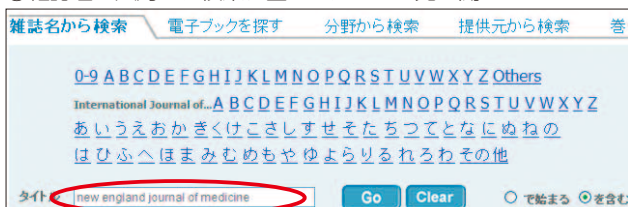
NEJM や Lancet を図書館に見に来て、古いものしかなくがっかりしたこと、ありませんか？これは電子ジャーナルの存在を知っていればすぐに解決することです。電子ジャーナルとはその名のとおりオンラインで提供されている電子化された雑誌のことで、学内 LAN がつながっている環境でご覧いただけます。外国雑誌はすべて電子ジャーナルを購読しているため、図書館には冊子体で購読していた当時のものしかなく、古いものが並んでいるという状態なのです。最新の外国雑誌を見たいときには図書館の検索用端末など学内 LAN の PC から電子ジャーナルを利用しましょう。また和雑誌についても、最近では電子ジャーナルで提供されているものもたくさんありますので、冊子体とともに活用してください。

【電子ジャーナルの見方】

①ホームページ上部水色のタブ左から2つめ「オンラインジャーナル」をクリック



②雑誌名を入力し、検索。出てきたリンク先を開く



※タイトルの頭文字からアルファベット順に探す「イニシャル検索」もできます。

③リンク先をクリック



※電子ジャーナルによっては、複数の出版社で閲覧できるもの、無料で公開されているものもあります。リンク先によって公開されている年号の範囲や文献の画質などが異なりますので、複数のリンク先が出てきた場合は、目的の論文が見られるか、それぞれ確認してみましょう。

●PubMed・医中誌 Web からフルテキストへ

PubMed には「奈良医大専用入口」があるのをご存知ですか？専用入口へは、図書館のホームページから入ります。Google などの検索エンジンからも PubMed にたどりつけますが、奈良医大で見られる文献かどうかを探すアイコンが表示

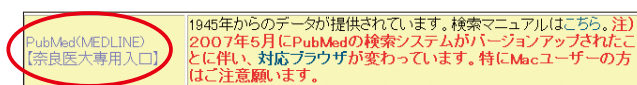
されるのは「奈良医大専用入口」から入ったときに限られます。

【PubMed 奈良医大専用入口への入り方】

①ホームページ上部水色のタブ左から3つめ「文献検索」をクリック



②一番上の項目 PubMed (MEDLINE) 『奈良医大専用入口』をクリック



PubMed (【奈良医大専用入口】経由) や医中誌 Web を検索し、検索結果をクリックすると「奈良医大 Find Full Text」という青いアイコンが出てきます。こちらが奈良医大にあるかどうかを探すためのアイコンです。クリックするとフルテキストへのリンクが表示されます。

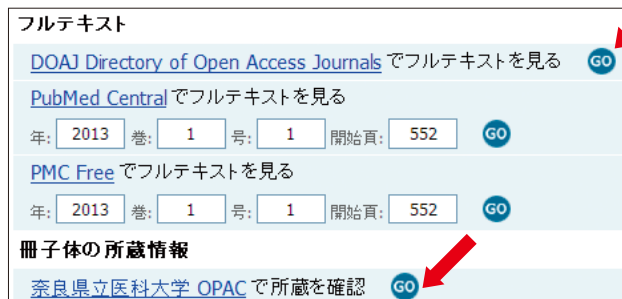
ここで「フルテキストへのリンクはありません」と出るとオンラインでは入手できない雑誌とわかりますので、図書館に冊子体の所蔵があるかを一つ下の項目で確認します。オンライン・冊子体とも奈良医大に所蔵がないことを確認してから、学外へ文献のコピーを依頼することができます(※有料)。学外への文献依頼方法については次回ご紹介いたします。

【フルテキストの探し方】

①このアイコンをクリック



②フルテキストへのリンクがあればクリック (なければ「冊子体の所蔵情報を確認」をクリック)



電子ジャーナルを知っていれば図書館に来ずとも学内の PC で文献を見ることができ、非常に便利なツールです。ぜひご利用ください。

次回は学外へ文献コピーを依頼する方法をご紹介します。お楽しみに！

産学官連携だより

発明等届出書～発表の前に～

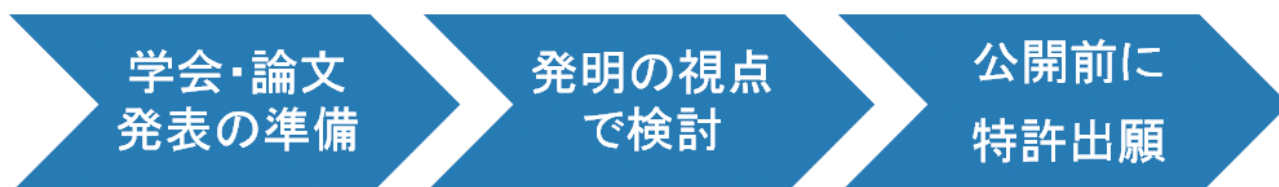
発明を特許権として認められ、特許登録を受けるには、「新規性」、「進歩性」、「産業上利用できるものである」という要件を備えなければなりません。このうちの「新規性」要件は、学術研究成果の公開（学会・論文発表）という大学の研究者に課せられたミッションと相反し、何らかの形で公開されますと「新規性」が失われ、発明に該当したとしても特許登録を受けられなくなります。



本学の産学官連携推進センターでも、これまでに相談を受けた事例において、既に学会のアブストラクトがHPで公開されていたり、論文発表済みで「新規性」の要件を欠くといったケースがありました。

特許出願を行ってから公開していただきますと、「新規性」は特許出願日で判断されますので、出願日時以降の公開は、その発明の「新規性」に影響を与えません。従いまして、特許出願→公開の順番を守ることが、特許登録を得るには必須です。

学会・論文発表をお考えの際には、研究成果を発明の視点から見つめなおし、特許登録の要件（「新規性」・「進歩性」・「産業上利用できるものである」）を備えているか、ぜひ検討してみてください。



研究者にとって特許出願には以下のメリットが考えられます。

- ☆各種の競争的資金の応募で特許出願した発明を利用又は発展させた研究を行うという計画を記載することができ、審査において有利に働き、研究資金獲得の可能性が高まります。
- ☆特許出願した発明の利用を企業に提案、企業とのアライアンスによる研究の発展が期待できます。
- ☆本学が承継した職務発明について、発明を行った研究者に対する補償等が行われます。

※発明については、vol.44 April 2013 p.14 産学官連携だよりをご参照ください。

発明等届出書の様式は、研究成果を発明の視点からとらえなおすことも考慮して作成しています。大学HP (http://www.naramed-u.ac.jp/library_center/sangakukan/policy.html) からダウンロード可能ですので、研究成果について心に引っ掛かることがあった場合には、ぜひ、試しに記入してみてください。そして、産学官連携推進センター（事務局内線 2552、大野特任教授内線 2481）へのご相談をお待ちしています。

研究紹介

私の研究歴

輸血部 教授 藤村 吉博



1973年の本学卒業です。ゆったりとした時代で、卒後の進路は特に決めていませんでした。しかし学生時代に基礎医学、特に細菌学の榎葉教授、薬理学の谷野助教、そして第二生理学の榎教授の講義で医学や医学研究に対する強い興味がわきました。

1) 小児科時代

小児科入局の動機は、1) 3才時の夏期、重症消化不良症に罹患し、大腿への大量皮下輸液で九死に一生を得た経験がある、2) 両親が臨床医になる事を望んでいた、3) 小児科助教授の福井弘先生の簡潔明快な講義と、一見奇人変人風の学者雰囲気引き寄せられた、の3点でした。入局後間もなく、当時の医局長にいじめの指導を受け、同年末には国立大阪病院小児科への転出を命ぜられました。部長は吉岡慶一郎先生で、先生からは「経験した症例は必ず論文として残すように!」という指導を頂きました。私の直上司はその1年前から同所で勤務中の吉岡章先生(現学長)で、中途半端な形で移動してきた私でありましたが、彼から小児科臨床と血液凝固検査の基本を手取り足取りでリセット教育して頂きました。検査部には高宮脩技官(後に信州大学医学部保健学科教授)がおられ、3人で抄読会等をし、新しい血液凝固研究への知識を深めました。このような事をきっかけに、母教室にも足が向くようになり、福井先生が新たに作成した von Willebrand 因子 (VWF、当時は第 VIII 因子関連抗原と呼称、後に訂正) に対する家兔抗血清を頂き、検査部で連日二次元交差免疫電気泳動を行い、希有症例である von Willebrand 病亜型の発見に勤めました。この目的は達成できませんでしたが、同解析法を用いて当時母乳栄養児に見られる特発性脳出血の患者血漿から PIVKA-II を発見し、本症が VK 欠乏で起きている事を最初に証明しました。以後 VK 依存性凝固因子に興味を持ち、その蛋白精製を始めようとしたのですが、かかる技術についての授業は大学では全くありませんでしたので、自ら Fisher 著のゲルクロマトグラフィーという本を購入し、何度も読み返しながら手探りで実験手技を習得しました。

1978年に小児科助手として大学に復帰し、まず凝固第 VIII 因子の研究に着手しましたが、同蛋白精製には難渋し、機能解析を中心とした学位論文を纏めました。この蛋白精製は後年、仕事を引き継いだ嶋緑倫先生(現小児科教授)により、後述のモノクローナル抗体を用いて達成されました。私はその後、第 II、IX、そして X 因子等の VK 依存性蛋白の精製や、これらの抗体作成に従事し、様々な凝固異常症の病態解析を行い、多くは邦文でしたが結果として残しました。この頃、吉岡章先生が英国留学からモノクローナル抗体作成技術を、その後、三上貞昭先生(現帝塚山大学教授)が DNA 解析技術を習得して帰国し、これらを凝固研究に応用する事で小児科教室の研究機運は大いに高まりました。

2) 米国留学

1984年1月から計3年間、米国 La Jolla にある Scripps 研究所に NIH-Fogarty 国際奨学生として留学する機会を得ました。指導者は VWF の pre-eminent authority と云われた Zimmerman 博士で、研究テーマは VWF の構造—機能相関解析でした。ここで、VWF が血小板 GPIb と最初に結合する機能ドメインを同定しました。これは今日 VWF-A1 ドメインと呼ばれ、抗血小板血栓薬の開発標的となっています。詳細は日本血栓止血学会誌 2010; 21:414-419 に記載してあります。

3) 輸血部研究と総括

1987年1月から本学輸血部講師、翌年、助教授を経て1998年10月に教授に昇進させて頂きました。輸血部での最初の10年間は VWF-GPIb 結合を修飾する蛇毒蛋白研究に従事し、新規抗血小板剤の開発を目指しました。研究はそれなりの結果を出しましたが、輸血医学領域では評価されず、蛇毒類似の金属プロテアーゼである VWF 切断酵素研究に切り替えたところ、これは血液難病である血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) の原因として注目を浴び、その後 ADAMTS13 である事が証明され、研究は爆発的進展を見せ、2008年にはベルツ賞を、また2012年には武田医学特別研究助成賞を受賞する事になりました(本学 HP の教員研究情報を参照)。

2014年3月末で定年を迎えますが、振り返ると「人間万事塞翁馬」でありました。しかし、1) 卒業後、早期から論文を書く事の重要性を繰り返し教育されたこと、2) VWF 研究を大きく軸づけること無く続けたこと、3) 留学を通じて日米間の研究者の考え方の違いを実体験したこと、4) 留学で学ぶべきは知識の輸入のみではなく、研究の種を蒔き、育て、そして採果することの過程を学ぶ事である、と悟った事が良かったと思います。余談ですが、2010年にノーベル化学賞を受賞された根岸英一先生が、あるインタビューを受けられた時、「金、金、金、と金を追いかければ金に逃げられるが、excellence of science を追い求めれば金がついてくる」とおっしゃっていました。私の業績は彼の爪の垢ほどですが、今その言葉の深さを噛み締めています。

最後に、今日、医学論文は概ね二つのパラメーターで評価されています。一つは Impact Factor (IF) で掲載論文誌の質の高さを示すものです。図1には私が迎った研究者人生で、それぞれの節目での IF と職責を示させて頂きます。もう一つは Citation Index と呼ばれるもので、書いた論文が他の研究者の仕事に影響を与え、彼らの論文に引用文献として掲載されているか? を示す指標です。我々の立場でいえば、「医学の発展に寄与した成果の論文なのか?」を問うものです。数種類知られていますが、無料で簡単に探索されるものとして Google Scholar があります。引用回数は英語で名前を記載すれば簡単に出来ますので、自己評価に有効です。

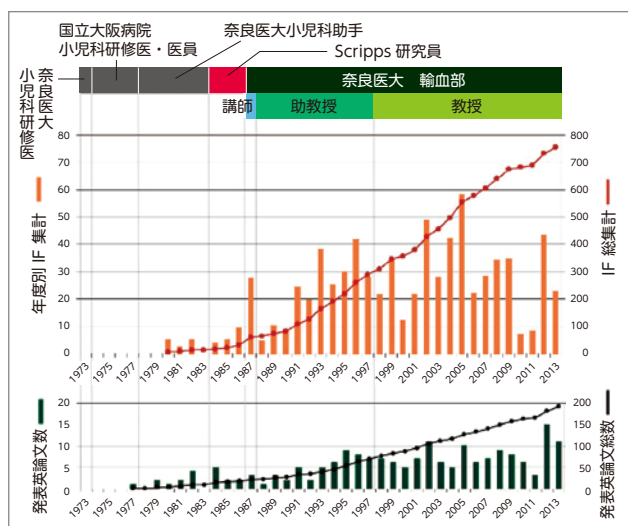


図 1. 私の職責と英語論文 (1973-2013年)

チェンマイ大学医学部長が本学を訪問されました

11月14日(木)、本学と学術交流協定を締結しているタイのチェンマイ大学から、医学部長ほか代表団3名が本学を訪問されました。

両学の医学部長等による懇談では、協定内容の見直しや共同研究の実施等に関し、活発な意見交換が行われました。

その後、長谷川教授(放射線腫瘍医学)、神野准教授(腫瘍センター)、内池技師長(中央臨床検査部)、西特命看護副部長(看護部)、吉川教授(放射線医学)による説明のもと施設見学が行われ、最新の医療機器等に関し熱心に情報交換が行われました。

チェンマイ大学は本学が初めて国際交流協定を締結(平成8年)した大学で、以来研究者だけでなく学生における交流にも相互に活発に取り組んできました。今回の訪問を受け、両学間の交流を一層推進することとしています。



懇談風景



(左から)チェンマイ大学代表団3名、山下教授、チェンマイ大学医学部長、喜多医学部長、大名看護部長、山下法人企画部長、山本准教授

「まほろば研修会～仕事と家庭の両立～」、「En女医Cafe」を開催しました

10月7日(月)に厳糧会館大ホールで女性研究者支援センター主催の「まほろば研修会～仕事と家庭の両立～」を開催しました。今回は「婚活」や「パラサイトシングル」といった言葉の生みの親でもある中央大学の山田昌弘教授を講師に迎え、「日本の未来をつくる男女共同参画」と題して講演いただきました。講演の中では、古い体質の労働慣行や社会保障制度が女性の経済的活躍を阻んでいる現状についての問題提議や「女性の活躍が経済活性化の鍵になる」ことを様々なデータを示されて分かりやすく説明いた



まほろば研修会で講演された山田教授

だきました。後半は病児保育に関して、センターの御輿久美子マネージャーから教職員を対象として実施したアンケート結果の報告や他学等における先進事例に関する紹介がありました。

また、10月18日(金)には医学科女子学生と女性医師の交流を目的とした「第2回 En 女医 Cafe」を開催し、女子学生の進路や将来に関する悩みや疑問に先輩の女性医師と一緒に話し合いを行いました。女性研究者支援センターでは、女子学生や職員が自分らしく働き続ける一助となるように今後もこの事業を続けていく予定です。



En 女医 Cafeの様子

平成 25 年度 中島佐一学術研究奨励賞の募集

この賞は、故中島佐一名誉教授のご遺族からの寄附金を財源として、医学の学術研究に優れた業績をあげた本学の若手教員に対して授与し、さらなる研究の発展を奨励することを目的としています。

つきましては、下記の募集要項により募集しますので、積極的なご応募をお待ちしています。

募集期間	平成 26 年 1 月 31 日 (金) まで		
募集要項	学内ホームページに応募要項及び申請書を掲載しています。 学内専用→研究推進課→各種団体からの研究助成金について →中島佐一学術研究奨励賞 http://top.naramed-u.ac.jp/jimu/kenkyu/nakajimasho.htm	応募資格	・奈良県立医科大学医学部医学科の若手教員(原則として申請時に45歳未満の者とする。) ・1教室につき1名(附属病院中央部門に勤務する教員については、その出身する教室に所属するものとみなす。)
		受賞者数	原則2名
		副賞	研究奨励金及び記念品を授与

漢方薬シンポジウム 2013 を開催しました

11月9日(土)に奈良県文化会館国際ホールにおいて奈良県と本学の共催による「漢方薬シンポジウム 2013」を開催しました。

このシンポジウムは、昨年度より実施しているもので、広く県民を対象として、薬草や漢方薬に関するシンポジウムを開催することで普及・啓発を行うことを目的としています。今回は、「体を温める大和当帰(トウキ)～奈良は良質な大和当帰の一大産地～」をテーマに日本東洋医学会名誉会員・名誉教授で元富山大・和漢医薬学総合研究所教授である鹿野美弘氏から「当帰ってなんだ」、本学客員教授の慶應義塾大学の渡辺賢治教授から「当帰を使った漢方薬」、と題した講演をいただき、パネルディスカッションでは藤本眞一教育開発センター教授をコーディネーターに、講演いただいたシンポジストに加え、薬剤師でもある奈良県手をつなぐ育成会の小西英玄理事長、生産者の立場から(株)パンドラファームの和田宗隆社長、日本製薬連合会の嶋田康男技術参与に参加いただき、大和当帰の良さや利用範囲、今後の栽培の課題、また医療現場における自費診療の可能性など活発な議論をいただきました。

閉会挨拶を行った吉岡理事長は「大和漢方医学薬学センターの立ち上げを進めており、今後とも本事業の発展に取り組んでいきたい。」と締められました。

会場には約680人も多数の参加者が詰めかけ、会場からも熱心な質問をいただくなど、漢方への関心の高さを伺うことができました。



閉会挨拶を行う吉岡理事長



パネルディスカッションで活発な議論

第1回大和漢方医学薬学セミナーを開催しました

11月10日(日)に厳橿会館大ホールにおいて、株式会社ツムラとの共催による第1回大和漢方医学薬学セミナーを開催しました。このセミナーは「指導医のための漢方セミナー」として漢方専門医取得を目指す医師を対象としたものです。

藤本眞一教育開発センター教授から「漢方専門医取得について」の説明に続いて、本学客員教授で奈良県漢方推進顧問も務められる慶應義塾大学渡辺賢治教授から「漢方の基礎知識Ⅰ(漢方の考え方・診断方法)」、「漢方の診察法」、「漢方の基礎知識Ⅱ(知っておきたい漢方薬ベスト10)」などの講義が行われ、診察法の講義では、腹診についての説明・実技も行われました。10時から昼食を挟んで16時までの長時間のセミナーとなりましたが、受講された先生方と講師の渡辺先生の間では診察法や漢方処方などについて熱心な質疑応答が交わされました。

当日は、本学附属病院ほか県内外の医療機関から26名が受講されました。今回は初級セミナーとして実施しましたが、今後も中級、上級のセミナーを実施していく予定です。



講義いただいた渡辺客員教授



腹診の実技

第1回産学官連携シンポジウム～医工連携の取り組み～を開催しました

12月3日(火)に本学厳糧会館大ホールにおいて近畿経済産業局、(独)科学技術振興機構、奈良県のご後援を得て「第1回奈良県立医科大学産学官連携シンポジウム～医工連携の取り組み～」を開催しました。

今回のシンポジウムは、本学がこれまで取り組んできた産学連携の成果、とくに「医工連携の取り組み」を外部に発信し、更なる産学官連携を推進することを目的として開催したもので、文部科学省 科学技術・学術政策局 産業連携・地域支援課 総括係長 小林様より「文部科学省の産学連携の取り組み、平成26年度支援施策について」ご講演をいただいた後、以下の本学で取り組んでいるプロジェクトを紹介しました。

- ①文部科学省 地域イノベーション戦略支援プログラム 採択課題「無意識生体計測&検査によるヘルスケアシステムの開発」刀根 庸浩(産学官連携推進センター 特任助手)
- ②(独)日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤A 採択課題「運動学習・支援のための多次元情報記録・提示とモデルベース強化学習」柴田 智広(奈良先端科学技術大学院大学 数理情報学 准教授)
- ③文部科学省 大学発新産業創出拠点プロジェクト 採択課題「複合型光ファイバを適用した産業及び医療用ツール開発プロジェクト」岡 潔((独)日本原子力研究開発機構 研究主幹)
- ④JST 研究成果展開事業、A-STEP 顕在化タイプ 採択課題「フワフワ感の解消を目指した<傾斜感覚適正化装置>の開発」和田 佳郎(生理学第一 講師)

⑤経済産業省 平成25年度 課題解決型医療機器等開発事業 採択課題「在宅排尿機能検査の基盤になる携帯式尿流量率計の市場化開発事業」平尾 佳彦(産学官連携推進センター 特任教授)

⑥経済産業省 平成25年度 課題解決型医療機器等開発事業 採択課題「新構造の振動子を用いた世界初の軟骨伝導による補聴器の開発」細井 裕司(耳鼻咽喉・頭頸部外科学 教授)

学内外より総勢96名の方にお集まりいただき、本シンポジウムは大盛況のうちに幕を閉じました。第1回目となる今回は、多数の企業関係者も来場され、本学の医工連携の成果発表だけでなく、多くの企業との出会い・交流の場ともなりました。ご参加・ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。



中央：発表内容について質問される吉岡学長、左：座長の酒井教授



中央：発表内容について質問される平尾特任教授、左：司会進行の大野特任教授

奈良県立医科大学・同志社女子大学術交流に関する包括協定に基づくシンポジウム 第7回シンポジウム「高血圧診療の進歩」を開催しました

12月14日(土)に本学と同志社女子大学の共催によるシンポジウムを同志社女子大学京田辺キャンパス頌啓館(しょうけいかん)ホールにおいて開催しました。

当シンポジウムは同志社女子大と本学が毎年交互に開催しているもので、今回は「高血圧 診療の進歩」をテーマに、座長である本学教育開発センター藤本眞一教授と同志社女子大学薬学部森田邦彦教授のお二人による進行で、本学内科学第一講座の斎藤能彦教授の基調講演「ヒトはなぜ高血圧になるのか？」に続いて、薬剤師の立場からメディキュアサポート株式会社かなで薬局の光岡千賀子管理薬剤師の「高血圧治療に薬剤師としてどう関わるか」、医師の立場で本学内科学第一講座の竹田征治助教から「慢性腎臓病に動脈硬化疾患を合併する新しいメカニズム～胎盤由来増殖因子の関与～」、栄養士の立場で阪南中央病院診療局の萩原喜代美栄養科部長から「高血圧患者における栄養アセスメントを考える」、保健師の立場で明日香村健康づくり課中屋幸恵調整員から「あすか健康プロジェクト48(AKP48)健診による高血圧予防の取り組み」と題して、それぞれ講演いただきました。

講演では血圧の起源なども含めた高血圧についてのしく

みや動脈硬化と高血圧の関係、明日香村での特色ある高血圧予防の取り組みなどについて、それぞれの立場から分かりやすく説明をいただきました。

県内外から多数の方々に参加いただき、総合討論の際には講演者それぞれの立場から会場へメッセージを送っていただくなど有意義な討論となりました。



総合討論の様



閉会挨拶を行う吉岡学長

平成 25 年度 外部資金獲得状況

101 件 312,719,420 円 (間接経費を含む) (平成 25 年 12 月 31 日現在)

※文部科学省科学研究費補助金を除く

(1) 平成 25 年度厚生労働科学研究費補助金

①研究代表者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名
創薬基盤推進研究事業	化学	教授	酒井 宏水	人工赤血球 (ヘモグロビン小胞体) 製剤の実用化を目指す研究
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	食品防衛の具体的な対策の確立と実行検証に関する研究
政策科学総合研究事業 (政策科学推進研究事業)	健康政策医学	教授	今村 知明	医療における情報活用を行う上での適切な国際疾病分類に関する研究
厚生労働科学特別研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	呼吸器機能障害の身体障害認定に関する研究
再生医療実用化研究事業	整形外科学	医員	上羽 智之	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究

②研究分担者

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	研究代表者
エイズ対策研究事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	血友病とその治療に伴う合併症の克服に関する研究	自治医科大学 坂田 洋一
エイズ対策研究事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究	独立行政法人国立病院機構 仙台医療センター 伊藤 俊広
エイズ対策研究事業	健康管理センター	准教授	古西 満	ART 早期化と長期化に伴う日和見感染症への対処に関する研究	市立大村市民病院 安岡 彰
がん臨床研究事業	耳鼻咽喉・ 頭頸部外科学	研究員	上村 裕和	NO 口腔癌における選択的頸部郭清術とセンチネルリンパ節ナビゲーション手術の無作為化比較試験	愛知県がんセンター 長谷川 泰久
再生医療実用化研究事業	整形外科学	教授	田中 康仁	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	整形外科学	講師	城戸 颯	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	整形外科学	医員	清水 隆昌	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	人工関節・骨軟骨 再生医学	教授	川手 健次	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	難治性骨折 (偽関節) に対するヒト骨髄細胞シートを用いた低侵襲治療手技の開発に関する研究	奈良県立医科大学 整形外科学 上羽 智之
再生医療実用化研究事業	整形外科学	教授	田中 康仁	間接鏡視下自己骨髄間葉系幹細胞移植による間接軟骨欠損修復 - 多施設共同、非盲検、ランダム化、並行比較試験	武庫川女子大学 脇谷 滋之
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	教授	岸本 年史	精神疾患患者に対する早期介入とその普及啓発に関する研究	東邦大学 水野 雅文
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	博士研究員	森川 将行	新たな地域精神保健医療体制の構築のための実態把握および活動の評価等に関する研究	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 竹島 正
障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)	精神医学	助教	池下 克実	自殺対策のための効果的な介入手法の普及に関する研究	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 山田 光彦
新型インフルエンザ等新興・ 再興感染症研究事業	感染症センター	講師	笠原 敬	自然災害時を含めた感染症サーベイランスの強化・向上に関する研究	国立感染症研究所 松井 珠乃
新型インフルエンザ等新興・ 再興感染症研究事業	感染症センター	講師	笠原 敬	成人の重症肺炎サーベイランス構築に関する研究	国立感染症研究所 大石 和徳
創薬基盤推進研究事業	第二生理学	教授	堀江 恭二	創薬・疾患研究のための細胞・組織コレクション供給体制確立に関する研究	独立行政法人 医薬基盤研究所 小原有弘
創薬基盤推進研究事業	分子病理学	教授	國安 弘基	Claudin を標的とした創薬基盤技術の開発	国立大学法人 大阪大学 近藤 昌夫
地域医療基盤開発推進研究事業	附属病院	病院長	古家 仁	WHO のチェックリストを用いた日本版「手術安全簡易評価システム」の開発と適応に関する研究	三重大学 兼児 敏浩
難治性疾患等克服研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	特発性心筋症に関する調査研究	独立行政法人 国立循環器病研究センター 北風 政史
難治性疾患等克服研究事業	第二内科学	教授	木村 弘	呼吸不全に関する調査研究	京都大学 三嶋 理晃
難治性疾患等克服研究事業	第三内科学	教授	福井 博	門脈血行異常症に関する調査研究	東京医科大学 森安 史典
難治性疾患等克服研究事業	神経内科学	教授	上野 聡	スモンに関する調査研究	独立行政法人 国立病院機構鈴鹿病院 小長谷 正明
難治性疾患等克服研究事業	神経内科学	講師	杉江 和馬	希少難治性筋疾患に関する調査研究	東北大学 青木 正志
難治性疾患等克服研究事業	小児科学	教授	嶋 緑倫	小児新生児期における遺伝性血栓症 (プロテイン C 異常症を含む) の効果的診断と治療予防法の確立に関する研究	九州大学 大賀 正一
難治性疾患等克服研究事業	皮膚科学	教授	浅田 秀夫	重症多形滲出性紅斑に関する調査研究	杏林大学 塩原 哲夫
難治性疾患等克服研究事業	輸血部	教授	藤村 吉博	血液凝固異常症に関する調査研究	慶応義塾大学 村田 満
難治性疾患等克服研究事業	新生児集中治療部	教授	高橋 幸博	小児新生児期における遺伝性血栓症 (プロテイン C 異常症を含む) の効果的診断と治療予防法の確立に関する研究	九州大学 大賀 正一
難病・がん等の疾患分野の 医療の実用化研究事業	泌尿器科学	教授	藤本 清秀	標準的治療の確立が望まれる難治性疾患に対する新規治療法の開発	九州大学病院 中西 洋一

難病・がん等の疾患分野の医療の実用化研究事業	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	標準的治療の確立が望まれる難治性疾患に対する新規治療法の開発	九州大学病院 中西 洋一
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品防衛の具体的な対策の確立と実行検証に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
食品の安全確保推進研究事業	地域健康医学	学内講師	佐伯 圭吾	国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究	京都大学 里村 一成
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	国際食品規格策定に係る効果的な検討プロセスの開発に関する研究	京都大学 里村 一成
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	新開発バイオテクノロジー応用食品の安全性確保並びに国民受容に関する研究	国立医薬品食品衛生研究所 手島 玲子
食品の安全確保推進研究事業	健康政策医学	准教授	赤羽 学	食品を介したダイオキシン類等の人体への影響の把握とその治療法の開発等に関する研究	九州大学 古江 増隆
政策科学総合研究事業 (政策科学推進研究事業)	健康政策医学	講師	小川 俊夫	医療における情報活用を行う上での適切な国際疾病分類に関する研究	奈良県立医科大学 健康政策医学 今村 知明
認知症対策総合研究事業	精神医学	准教授	安野 史彦	BPSDの症状評価法および治療法の開発と脳内基盤解明を目指した総合的研究	筑波大学 新井 哲明
厚生労働科学特別研究事業	健康政策医学	教授	今村 知明	呼吸器機能障害の身体障害認定に関する研究	奈良県立医科大学 第二内科学 木村 弘
厚生労働科学特別研究事業	第二内科学	准教授	吉川 雅則	呼吸器機能障害の身体障害認定に関する研究	奈良県立医科大学 第二内科学 木村 弘
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業	輸血部	准教授	松本 雅則	科学的根拠に基づき輸血ガイドラインの策定等に関する研究	名古屋大学 松下 正
難治性疾患等克服研究事業	輸血部	教授	藤村 吉博	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導治験	慶應義塾大学 宮川 義隆
難治性疾患等克服研究事業	輸血部	准教授	松本 雅則	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導治験	慶應義塾大学 宮川 義隆
難治性疾患等克服研究事業	総合医療学	准教授	西尾 健治	血栓性血小板減少性紫斑病に対するリツキシマブの第Ⅱ相医師主導治験	慶應義塾大学 宮川 義隆

(2) 独立行政法人 国立がん研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
がん研究開発費事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	国際比較の観点からみたわが国のがん対策のあり方に関する研究	国立がん研究センター 加藤 雅志
がん研究開発費事業	健康政策医学	講師	小川 俊夫	がん研究企画と評価の方法論に関する海外動向調査と、医療経済的視点からの考察	国立がん研究センター 藤原 康弘
がん研究開発費事業	放射線医学	講師	穴井 洋	緩和 IVR に関する研究	国立がん研究センター 荒井 保明

(3) 治験促進センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
治験推進研究事業	第一内科学	教授	斎藤 能彦	治験の実施に関する研究 [エプレレノン]	公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 中川 俊男
治験推進研究事業	眼科学	教授	緒方 奈保子	治験の実施に関する研究 [プリリアントブルー G250]	公益社団法人 日本医師会 治験促進センター 中川 俊男

(4) 独立行政法人 国立循環器病研究センター

研究事業名	所属	職名	氏名	研究課題名	主任研究者名等
循環器病研究開発費	第一内科学	教授	斎藤 能彦	糖尿病患者の心血管疾患予防の最適化に資する基礎データの蓄積	独立行政法人 国立循環器病研究センター 小川 久雄
循環器病研究開発費	第一内科学	教授	斎藤 能彦	バイオマーカー・予後データ解析	独立行政法人 国立循環器病研究センター 安斉 俊久
循環器病研究開発費	精神医学	准教授	安野 史彦	認知症に関与する生物学的因子の分析と評価	独立行政法人 国立循環器病研究センター 猪原 匡史

(5) 経済産業省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
課題解決型医療機器等開発事業	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	教授	細井 裕司	新構造の振動子を用いた世界初の軟骨伝導による補聴器の開発
課題解決型医療機器等開発事業	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	在宅排尿機能検査の基盤になる携帯式尿流量率計の市場化開発事業

(6) 文部科学省

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
科学技術人材育成費補助金 女性研究者研究活動支援事業	女性研究者支援センター	センター長	喜多 英二	女性研究者が研究を継続・発展させ、キャリアアップを図ることができる環境整備を行う
地域産学官連携科学技術振興事業費補助金 (イノベーションシステム整備事業) 地域イノベーション戦略支援プログラム (国際競争力強化地域) [「はいはんな学研都市ヘルスケア開発地域」]	産学官連携推進センター	特任教授	平尾 佳彦	MEMSを用いた無拘束生体計測基盤技術 (新たな生体測定・診断システム) の開発

(7) 独立行政法人 科学技術振興機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
研究成果展開事業 産学共創基盤基盤研究プログラム	第一解剖学	教授	西 真弓	長波光蛍光体ナノ粒子による担癌マウスの無励起光型蛍光イメージングおよび細胞外マトリックスの動的制御

研究成果展開事業 研究成果最進展開支援プログラム シーズ顕在化	第一生理学	講師	和田 佳郎	フワフワ感の解消を目指した“傾斜感覚適性化装置”の開発
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H24年度採択)	地域健康医学	特任講師	大林 賢史	視覚レベル照度ロガーの開発とその実用化試験～光曝露量が健康に及ぼす影響に関する大規模疫学調査における実施～
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H24年度採択)	第一内科学	講師	染川 智	肺高血圧症における血中マーカーの開発
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H24年度採択)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	准教授	山中 敏彰	平衡・運動機能に対する平衡代行システムの効果検証と実用化
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H25年度採択)	産婦人科学	教授	小林 浩	分子シミュレーションにより設計された新規ペプチド薬の抗腫瘍実験
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H25年度採択)	健康政策医学	准教授	赤羽 学	骨再生医療に貢献する骨芽細胞シートの保存・輸送法の開発
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H25年度採択)	分子病理学	講師	千原 良友	超高速リアルタイムPCRシステムを用いた性感染症起炎菌の高速(即日)診断
研究成果最進展開支援事業 A-STEP (H25年度採択)	耳鼻咽喉・頭頸部外科学	助教	西村 忠己	外耳道閉鎖症に適用可能な軟骨伝導補聴器の開発

(8) 独立行政法人 宇宙航空研究開発機構

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
宇宙環境利用科学委員会 WG/RT	放射線腫瘍医学	博士研究員	大西 武雄	きぼうにおける宇宙生命科学的研究計画

(9) 奈良県

研究事業名	所属	名	研究担当者	研究課題名
奈良県自殺未遂者支援・調査事業	精神医学	教授	岸本 年史	自殺未遂者等に心理教育を実施し、退院後に問題解決を図るために適切な社会資源と連携するケースマネジャーを養成し、再発を防止する

(10) 奈良県 明日香村

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
地域医療連携事業	地域健康医学	教授	車谷 典男	あすか健康プロジェクト 48

(11) 三重県 名張市

研究事業名	所属	職名	研究担当者	研究課題名
伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査事業	脳神経外科学	教授	中瀬 裕之	伊賀・奥宇陀地域脳神経疾患医療体制整備に関する調査

(12) その他 財団法人等

団体名等	所属	職名	氏名	研究課題名
(公財) 大同生命厚生事業団	中央臨床検査部	技師	宇井 孝爾	2種のβラクタマーゼを有するE. coliの分子生物学的性質を解析
公益信託 循環器学研究振興基金	法医学	助教	粕田 承吾	単球由来樹状突起による血栓形成促進作用機構の解明
(公財) 沖中記念成人病研究所	救急医学	講師	藤岡 政行	クモ膜下出血後の遅発性脳虚血におけるADAMTS13の病態生理学的意義とその治療応用についての検討
(公財) 日本応用酵素協会	第一内科学	助教	染川 智	新規小胞体膜蛋白の動脈化および肺高血圧症における意義の解明
日本イーライリリー株式会社	精神医学	准教授	島本 卓也	In vitro 解析によるCentral Pontine Myelinolysisの病態解明
(一社) 農協共済総合研究所	健康政策医学	准教授	赤羽 学	高エネルギー外傷による粉砕骨折に対する再生医療技術を用いた治療法開発
パクスター凝固関連研究基金	小児科学	大学院生	南 博明	第Ⅷ因子上のトロンピン結合部位の同定; 第Ⅷ因子-トロンピン制御軸による新規向凝固・抗凝固薬の基礎研究
(公財) 倶進会	健康政策医学	大学院生	加藤 礼識	東北地方K村の医療崩壊要因の解明と高齢化過疎地区の地域医療の在り方の研究
(公財) アサヒグループ学術振興財団	脳神経システム 医科学	教授	坪井 昭夫	嗅覚を用いて油の嗜好性や摂取量をコントロールする基盤研究
(公財) ソルト・サイエンス研究財団	脳神経システム 医科学	助教	高橋 弘雄	TRPチャンネルを介したマウス嗅覚によるCO ₂ 感知機構の解析
(公財) 喫煙科学研究財団	脳神経システム 医科学	教授	坪井 昭夫	喫煙時の匂いにより快・不快感を誘起する脳内神経回路の解明
(公財) 喫煙科学研究財団	循環器システム 医科学	教授	中川 修	転写調節因子の機能調節機構と喫煙関連物質の影響
日本イーライリリー株式会社 (Lilly Grant Office)	精神医学	助教	牧之段 学	幼年期社会的経験が社会的認知に与える影響について
(公財) 日本心臓財団	第一内科学	助教	染川 智	動脈発生に必須の新規膜蛋白の分子機序と病態における意義の解明
Bayer HealthCare Pharmaceuticals Special Project Award	小児科学	准教授	野上 恵嗣	高齢者睡眠の質向上を目指す研究 ～交感神経活動による排尿症状・睡眠障害連関の証明～
(一財) カワイサウンド技術・音楽振興財団	耳鼻咽喉・頭頸部 外科学	助教	下倉 良太	外耳道を開放したまま装着できる軟骨伝導補聴器の騒音下語音明瞭度に関する研究
(公財) 循環器病研究振興財団 (バイエル循環器病研究助成金)	血栓制御医学	講師	松井 英人	VWF-ADAMTS13反応軸制御に基づく抗血栓症予防-出血リスクを軽減した日本人仕様の抗血栓症治療戦略の基盤構築を目指す
(公財) 武田科学振興財団	第二生理学	教授	堀江 恭二	ホモ変異体ES細胞を用いた1細胞レベルでの多能性制御機構の解析
財団法人 三井生命厚生事業団	消化器総合外科学	准教授	庄 雅之	膵神経内分泌腫瘍肝転移に対する新規局所治療に関する基礎的・臨床的研究
アクテリオン アカデミア プライズ	第一内科学	助教	染川 智	ALK1受容体シグナルの下流分子TMEM1100の肺高血圧における意義の解明
(公財) 日本応用酵素協会	第一内科学	助教	染川 智	新規小胞体膜蛋白の動脈化および肺高血圧症における意義の解明
(公財) 武田科学振興財団	第一内科学	助教	竹田 征治	抗動脈硬化因子可溶性F1+1による血管内皮保護を介した慢性腎臓病関連動脈硬化症の抑制
(公財) 武田科学振興財団	脳神経システム 医科学	助教	吉原 誠一	再生医療を目指した成体脳における神経活動依存的な新生神経回路形成機構の解明
(公財) 山田科学振興財団	脳神経システム 医科学	教授	坪井 昭夫	嗅覚における匂い経験依存的な神経回路再編の分子機構
(公財) 武田科学振興財団	精神医学	助教	牧之段 学	オリゴドントロサイト機能とシナプス形成
(公財) 母子健康協会	小児科学	助教	武山 雅博	プロテインCおよびプロテインSによる凝固第Ⅷ因子の制御機構の解明および新規血友病治療製剤への応用
(公財) アステラス病態代謝研究会	脳神経システム 医科学	助教	高橋 弘雄	嗅覚を用いた脂質代謝異常の治療法の開発
(公財) テルモ科学技術振興財団	整形外科	医員	清水 隆昌	細胞シートと微小血管外科を応用した人工骨内の3次元血管網構築

特別支援学校生徒の職場実習を行いました

総務課 人事給与係

11月11日(月)から15日(金)の5日間、県立高等養護学校生徒の職場体験実習を実施しました。県立高等養護学校の生徒が本学で職場体験実習を行うのは4回目となりました。今回は3年生の井上光明君と杉岡大基君の2名が実習を行いました。

実習の内容は、禁煙パトロール、校内の清掃、駐輪場の整理、附属図書館の図書の運び出しや整理、患者用車椅子の清掃、広報紙の折り込み作業など多岐にわたる雑務的な業務を行いました。体力や気力を必要とする業務ばかりでしたが、黙々と地道に取り組んでくれました。仕事ぶりは非常に丁寧で感心しました。

今回の実習では日頃職員が携わっている様々な雑務的な業務について、障害者へ雇用の機会として提供することで、より多くの職員が障害者と関わり障害者雇用に対する理解を深めるとともに、職員の業務の負担軽減にも繋がる取り組みになったのではないかと実感しています。



実習「禁煙パトロール」の様子

また、生徒達はしんどかったけれど楽しかったとの感想を述べてくれました。この実習を通じて働くことのしんどさとともに、自らの勤労が誰かの役に立つということを感じてもらえたのではないかと思います。

本学としては今後とも、障害者雇用への理解促進の取り組みを進め、雇用機会の拡大に努めていきます。

〈実習を終えての感想〉

井上 光明君

新聞紙の折り込み作業やタバコの吸い殻拾い、車椅子の清掃作業、図書館での作業等色々な作業をして、毎日が楽しかったです。

足が痛かったり、しんどい時や腰が痛かった時もありましたが、みなさんにやさしく指導してもらったので楽しく実習する事が出来ました。



杉岡 大基君

車イスの整備は患者さんに喜んでもらえるようにこまかい所までみがきました。タバコやごみもたくさん落ちていたので病院に来られた方が気持ちよく思ってもらえるように頑張って拾いました。とっても楽しかったです。ありがとうございました。



(病院管理課)

附属病院で中学生の職場体験学習を実施しました

病院管理課 病院総務係

本院では毎年、橿原市内の中学2年生の職場体験学習を受け入れています。今年も10月～12月の間で八木中学校、光陽中学校、畝傍中学校の生徒さんがそれぞれ2日間ずつ、病棟での看護体験、薬剤部・中央臨床検査部・中央放射線部の部門見学、医療技術センターでの医療機器模擬体験、医師・看護師インタビューを行いました。

看護体験では、聴診器を使って自分の血圧を測ったり、看護師と一緒に患者さんへの看護の様子を見学しました。看護師と一緒に実際の仕事を間近で見たことで、看護師志望の思いを強くした生徒さんもおられました。

部門見学では、各部の職員の案内で、調剤や化学療法室のミキシングの様子、検査機器での検査、CT等の検査や検査結果の画像診断の様子を見学しました。普段目にする事のない機器に皆、驚いていました。医療技術センターの医療機器模擬体験では、患者さんが使うのと同じ医療機器の使用体験をしたことで、患者さんの気持ちを少し理解できたようです。

医師・看護師インタビューでは、生徒さんたちは知りたいと思ったことを率直に質問しており、医師・看護師は自

分の経験をもとに丁寧に答えておられました。

今回の職場体験学習を通じて、医療に興味を持ち続け、将来の夢の実現に生かしてくれることを期待しています。



調剤室で調剤の様子を見学



臨床工学技士の業務について質疑

院内コンサート『SORAからの贈り物』を開催しました

なかよし保育園 片桐 裕芽子

8月29日(月)にC棟2階売店前廊下にて、所属するSORAのメンバーとともに、ゴスペルスタイルによる院内コンサート『SORAからの贈り物』を開催しました。

SORAは、関西を中心に「歌のある人生の充実」をテーマに歌の力を届けるゴスペルスタイルのクワイア『human note』に所属するチームで、2011年12月橿原で行われたイベントをきっかけに、さまざまな職種の歌うことが大好きな人たちが集まって結成されたチームです。

この日のコンサートが初の単独コンサートでしたが、関係者の方の支援、チーム講師による熱い指導、そしてメンバーの情熱がミックスされて本番を無事に迎えることができました。

コンサートでは、『歌のチカラを届けたい』という思いで『human note』のオリジナルソングと、皆さんがよく知っている曲を披露しました。会場の皆さんに参加してもらった『ふるさと』、『翼をください』は心のコもったあたたかい歌声が響き渡り感動しました。また、私たちの歌声に涙してくださる方や、リズムに乗って笑顔で聴きながら会場全体をあたたかく包み込んでくださった皆さんに、私たちが元気で勇気をもらい、改めて歌の持つチカラのすばらしさを感じさせてもらうことができました。これからもこの思いを大切に、日々の保育の中でも子どもたちに歌の楽しさを伝えていきたいと思っています。

今回、一職員としてこのようなかたちでチームのみんな

と歌える機会を持たせてもらえたこと、そして自分たちの歌をたくさんの方々に聴いてもらえたことはとても光栄なことであり、これからもこのような機会を大切に、歌のもつチカラを信じて『歌のある人生のすばらしさをたくさんの人たちに届け続けていきたいです。』



SORAのメンバー



コンサートの様子

第1回在宅緩和ケア地域連携研修会(ケアカフェちゅうわ)を開催しました

緩和ケアセンター長 四宮 敏章

第1回在宅緩和ケア地域連携研修会「ケアカフェちゅうわ」を10月27日(日)に厳橿会館にてワールドカフェスタイルで開催しました。カフェのおしゃべりのような、オープンで自由な会話を通して、生き生きとした意見の交換や、新たな発想が出てくることを期待して、コーヒー等の飲み物や茶菓子を少し用意してBGMを流す環境作りを行いました。第1回のテーマは、「顔の見える関係をつくる」「連携するにあたっての問題点を明確にする」で、事例を通してがん診療に携わる病院、診療所、訪問看護ステーションの医師、看護師、薬剤師などさまざまな職種の方が病院と在宅医との連携や質の高いケアの提供方法などを中心に意見交換しました。最終模造紙8枚とポストイット120枚に今後の連携に参考になる意見が出されました。また、意見交換することで出席者同志の懇親も深まり有意義な1日となりました。

がん対策推進基本計画においては、がん患者とその家族が可能な限り質の高い生活を送れるよう、緩和ケアが、がんと診断された時から提供されるとともに、診断、治療、在宅医療など様々な場面で切れ目なく実施される必要があるとされています。このような研修会を定期的で開催することにより、がん治療病院と地域とをシームレスに連携することができるようになることを願っています。



ワールドカフェスタイルで和やかに研修

パプアニューギニアでの医療ボランティア活動参加報告

総合医療学 准教授 西尾 健治

2013年6月19日から7月6日の間、医療過疎の地パプアニューギニアで行われたパシフィックパートナーシップ2013(環太平洋共同医療活動、以下PP13)の一部に参加させていただきました。パシフィックパートナーシップとは、2006年以降米軍が中心となり、各国が参加して毎年3-4ヶ月かけて、医療や人道支援を環太平洋地域で行うもので、2010年より日本も参加しています。この活動は、米軍・豪軍・日本自衛隊・NGOなどが、災害時に、いかに共同で医療・人道支援活動を計画・遂行しうるかという訓練も兼ねており、今年は医療過疎の地パプアニューギニアで行われました。

パプアニューギニアは赤道のやや南、オーストラリアの北に位置し、国土は日本の約1.5倍ありますが、人口は673万人でGDPは世界135位で極貧の国です。医師は全国で600人台とかなり少なく、検査機器のCTも首都にひとつあるだけのことでした。

6月19日小牧空港を自衛隊機KC767機で飛び立ち、首都ポートモレスビーを経由して、ウェワク(第二次世界大戦時、米・豪軍と日本軍の死闘があった場所)に降り立ちました。そこより豪軍に合流して、米軍人と一緒に豪軍軍艦Tobruk船底での、30人部屋生活が始まりました。3段ベッドで、ベッド間の上下空間が狭くてベッド上に座ることができず、他にも食堂以外に座れるところもありませんでしたので、当初は随分過ごしにくかったです。でも慣れるもので、そんな自分のベッドがいつのまにか自分の家のようにいとおしくなりました。豪軍軍艦で寝泊りしながら、水陸両用車で現地に上陸して医療活動を行いました。また、ウェワクでは戦没者慰霊碑にも参拝しました。10万人以上の日本兵が亡くなったパプアで、祖国を思いながら無念にも散っていった英霊たちの思いを、ヤシの葉陰や、南十字星に感じながら、当時敵国であった米軍・豪軍と、今は一緒に豪軍の船で共同生活をしながら働くことに、PP13の意義深さを痛感しました。

豪軍の軍艦でヴァニモに行き、現地の病院やジャングルの中

の学校や田舎の診療所での医療活動を行いました。患者さんには咳が続く結核の人や貧血と脾腫を呈するマラリアの人が多数おられました。特徴的だったのは紫外線が強いためか、若者の白内障が多く、またヤシの実の回りについている硬い毛で耳掃除をしているためか、若者の外耳道炎・中耳炎が多かったです。さらに治安が悪くてレイプやDVが多く、あごの骨をおられた女性やナイフで刺された女性なども受診されていました。

実際の医療のみならず、現地の医療者に心肺蘇生(CPR、ACLS)や外傷初期診療(ATLS)などを教えることにも参加しました。参加して教えること自体よりも、いちばん困難だったのは、だれがどのように教えるか、予定をいかに入れていくかということの調整で、多国間の調整の難しさを痛感しました。さらにジャングルの中の医療の情報はまったくない状況でまるで災害時のようでした(事前に知らされていた地名も間違っていました)。しかし訓練を繰り返すことにより、いかに多国間で連携をとればいいのか、どんな種類の情報を集めればいいのか、いかに指揮命令システムを作り上げていけばいいのかなどの問題点がより鮮明になり、今後に生かせるものとなりました。

今回、総合医療学教室の大野先生と一緒にPP13に参加させていただきましたが、このミッションで多くの自衛官や医療者とかかわることができ、貴重な仲間を得、医療資源の乏しい災害時にいかに動くべきかについて貴重な経験となりました。許可をいただきました吉岡学長と古家院長ならびに総合医療の医局員の皆様へ感謝しております。ありがとうございました。



多国籍医療チーム(緑の服が大野先生と私)

(看護部)

ドクターカーへの看護師の同乗を開始しました

高度救命救急センター 救急看護認定看護師 伊藤 憲子

ドクターカーとは救急現場に医療者が赴き、できる限り早期に治療を開始し“Preventable Death(防ぎえた死)”を減らし救命率を向上させることを目的とする救急車のことです。当院と中和広域消防組合との共同で1998年より運用されているドクターカーは、ワークステーション方式とよばれるシステムで行われています。中和広域消防組合の救急隊3名が当院に常駐し、通常業務を行うと共にドクターカー事業に対して待機しています。ドクターカー制度開始当初は、中和広域管内のほぼすべての院外心肺停止症例に対して出動し、年間約200件出動していました。しかし、院外心肺停止症例に対する救急救命士の処置範囲拡大を受け、現在は重症外傷や重症内因性疾患を中心にドクターカーの運用を行っています。重症外傷や重症内因性疾患に対して、初療室で開始されていた診療をドクターカーで医師が現場に赴くことによりプレホスピタルから開始することができます。初療室では医師が実施する救命処置の介助や医療資機材の管理、診療の記録などは看護師が行っており、チームの一員として看護師がドクターカーに同乗することで初療室に近い環境になるメリットがあります。また、診療の補助だけではなく家族看護や患者さんの自宅に行った際にはその生活状況の観察など、プレホスピタルから看護が開始できるようになりました。

2013年4月から、4名の看護師が同乗しています。4月からのドクターカー出動件数は平均9.8件/月であり、そのうち平均7.1件/月で看護師が同乗しています。

プレホスピタルは院内と全く環境が異なり自身の安全管理が必要となる現場もあります。また、少ない医療資機材や人員、さらには狭い救急車内で何をやるのか、どこまでやるのか優先順位を考慮しながら医師、救急隊と連携し看護を実践する必要があります。同乗看護師を増やすための教育などが今後の課題です。



中和広域消防組合とともに

平成25年度奈良県在宅医療推進事業(多職種連携研修)に採択されました

地域医療連携室 係長 栗田 麻美

少子高齢化や医療の高度化の影響を受け、医療機関では「退院調整」の必要性が高まり、地域との連携を担う部署が退院、在宅への療養環境の調整を行うことが多くなっています。

当附属病院地域医療連携室でも、退院困難な患者さんに対し、主治医・看護師からの依頼を受け、退院後の療養環境の調整を行っています。回復期リハビリテーション病棟や医療療養病棟などへの転院に加え、医療的ケアを複数有した自宅退院への調整が年々著しく増加しております。在宅と医療機関との違いは、介護保険制度を始め障害者総合支援法などのサービスを患者さん個々の状況に合わせて組み合わせ療養環境を整えていきます。おのずと様々な機関の多職種での連携が必要となるのが特徴です。

しかし、現在、地域医療連携部署の実務者の情報交換や課題の共有の機会がなく、在宅の保健・医療・福祉との連携を進める上で連携の課題が不明確な状況です。このため課題を明らかにし効果的な多職種連携のあり方を探りたいと考え、このたび奈良県の平成25年度在宅医療推進事業(多職種連携研修)に「在宅医療充実に向けた地域医療連携機能のあり方検討」をテーマに応募し、採択されました。

今後、平成26年1月に県内の医療機関の地域連携の実務担当者を対象に、南北2か所にて第1回交流会を開催し、情報交換や課題の抽出を行い、平成26年3月に課題を踏まえた研修会および、今後の連携の在り方や実務者の交流の在り方について検討を行う予定です。

e-ラーニングを活用した看護技術教育を実施しています

看護部 基準委員 山内 美智子

看護部では平成23年度から、e-ラーニングを活用した看護技術教育を実施しています。e-ラーニングを活用した教育は、①最新の情報を用い、根拠を明確にした学習ができる、②動画や図を活用し、具体的なイメージができる、③インターネットを活用しいつでもどこからでもアクセスできる、という特徴があります。大学附属病院の看護師として、常に最新の根拠を持って看護技術を習得することは重要であり、e-ラーニングは効果的に活用できるツールです。

B病棟5階では、e-ラーニングを使った看護技術教育を推進しており、その活用の実際を紹介します。

e-ラーニングに掲載されているコンテンツ数は259です。B病棟5階で特に必要と考えられる項目や知っておいてほしい看護技術の項目に優先順位をつけてピックアップしました。毎月10項目の課題をスタッフに提示し、e-ラーニングを使って各項目の学習をした後、知識の確認テストを実施してもらっています。各自でチェック表にサインをもらい、進捗状況を確認しています。

開始から5か月が経過し、スタッフからe-ラーニングを活用することで根拠をもった学習をすすめることができ、行った看護

技術のポイントや注意点がわかるといった声や自分の看護技術に自信を持つことができるといった声が聞かれており、教育的効果があったと評価しています。次年度からはe-ラーニングを活用した効果的な新人教育を検討しています。

医療の高度化に伴い患者さん・家族のニーズも多様化しており看護の質が問われています。大学病院の看護師として最新の技術を学習し、根拠を持って安全安楽に看護を実践していくことが必要です。主任としてe-ラーニングを活用し、専門職として誇りを持ちケアを行うことや学習することの喜びを知ってもらいたいと思っています。そして、高いスキルを持つスタッフを育て、チームとして一緒に働いていきたいと考えています。

※12月からは、奈良県立医科大学附属病院への就職内定者の方への使用も開始します。



B病棟5階スタッフと指導場面

平成25年度医学教育等関係業務功労者表彰

大学における医学についての教育、研究、患者診療等に関する業務について、特に顕著な功績があったとして、11月21日に次のお二人が文部科学大臣から表彰されました。



丸岡 武夫さん
(医療技術センター)



相地 和代さん
(看護部)

部門紹介

輸血部

輸血部では輸血に関する検査及び血液・血液製剤の管理業務を担っており、医師・薬剤師・臨床検査技師・臨床工学技士・看護師と多職種が協働し、安全な輸血療法の提供を行っています。看護師は主に自己血採取・造血幹細胞採取に携わり、平成24年度年間実績で自己血採取約600件、造血幹細胞採取約20件を実施しています。

自己血輸血は、同種血輸血による副作用や輸血感染症などを防止するために、最も効果のある輸血療法であり、患者さんが医療へ参加し、病氣と闘う意識を高めることによって得られる精神的な効果も指摘されています。しかし、自己血採取は健常者を対象とする献血とは違い、基礎疾患を有する患者さんや、高齢者・妊婦なども対象となるため、採血時に血管迷走神経反射等のリスクもあり、より専門的な知識と技術が要求されます。

また造血幹細胞採取は長時間を要する上に、化学療法を繰り返して体力も気力も低下している時期に行う事が多く、術前訪問を実施しできる限り患者さんの苦痛を軽減できるよう

努力しています。

日本自己血輸血学会と日本輸血・細胞治療学会は、輸血療法の安全性・信頼性を担保する輸血のスペシャリスト看護師を育成すべく、学会認定による「自己血輸血看護師認定制度」を設立しています。

当院でも自己血輸血認定看護師、臨床輸血認定看護師の資格取得を目指し、今後もより専門的知識を持って安全な自己血採取・造血幹細胞採取業務を行っていききたいと思います。



A病棟6階北

婦人科では思春期から老年期といった女性の生涯にわたる女性生殖器疾患に対して手術や化学療法、放射線治療などが行われています。女性としての特徴や社会的・家庭的立場など患者さんのライフサイクルを踏まえた援助が必要です。時には療養上の配慮や精神的サポートで難しい面もありますが、女性同士だからこそ分かり合えることや患者さんから教えていただくこともたくさんあります。

所属の基本方針として、①大学病院としての先進医療に取り組むと同時に緩和医療と連携して患者さんが安全に、かつ安心して入院生活を送ることができるよう援助します。②医師・看護師・コメディカル間で連携し患者さんの治療をトータルにサポートできるチーム医療を目指します。以上の2点

を挙げています。この2つの方針のもと医師・看護師でのカンファレンスに力を入れ、患者さんの病態を全員で理解し早期に対応できるようにしています。



A病棟7階北

A病棟7階北は眼科・皮膚科・形成外科センターの混合病棟です。

眼科は手術件数が多く、平成24年度は2000件以上です。白内障手術が半数以上で、合併症のある高齢の患者さんが非常に多いため、丁寧な手術オリエンテーションや安全な療養環境に最も配慮しています。平均在院日数は6日と短く、また稼働率の変動が大きい状況ですがチーム一丸となって全力を尽くしています。

皮膚科については、悪性腫瘍、自己免疫疾患、蕁麻疹、感染症などの患者さんが多く、急性期から慢性期、終末期まで幅広い看護が求められており、退院支援に関わるカンファレンスも積極的に行っています。

平成24年4月より形成外科センターが設置されました。悪性腫瘍や熱傷、難治性褥瘡、顔面骨折などの手術をされています。どちらも頭から足先まで全身の部位が対象であり、

しっかりとした疾患の理解とそれにつながる看護が重要です。

看護師は眼科チームと皮膚科・形成外科チームの2チームで勤務しています。チーム内、チーム間の協力や応援は不可欠ですが、看護師経験豊富なジェネラリスト看護師を活用し、チームの看護実践能力を高め、みんなで動きやすい病棟になるように頑張っていきたいと思います。



総合防災訓練を実施しました

11月20日午後、あいにく小雨が降ったり止んだり、大変寒く天候には恵まれませんでした。理事長、副理事長、病院長を始めとした本学幹部にも参加頂き、総勢約120名という大規模な訓練を行いました。

今まで個別に行っていた「災害対策本部」「自衛消防・防災隊」「防災センター」「エネルギーセンター」「各病棟」の訓練の集大成とでもいべき総合防災訓練を、中和広域消防組合榎原消防署（以下、消防署）にもご参加頂き実施しました。

▶自衛防災訓練

震度5強の強い揺れが観測され、大学本部棟、B病棟6階では火災発生のため要救助者が生じたとの想定の下、自衛消防・防災隊の各地区隊が消火、救出、救護、避難誘導活動を行いました。

さらにB病棟6階では、アクションカードを活用した実践的な活動を実施。

また、模擬患者15名の搬送訓練に取り組みました。

▶消防署による展示訓練

特別救助隊、梯子車隊等の迫力ある訓練には、見学者から思わず拍手が起きました。

▶訓練検証会

訓練検証会を開催。西岡予防課長（消防署）から、「取り組みの第一歩としては素晴らしい訓練」と評価して頂きました。

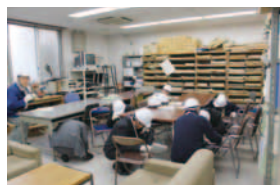
参加者からは、「災害時の連携のあり方や自分が一体何をしなければならぬかがイメージできた」との声を多く頂きました。

今後は、これまでの訓練で明らかとなった防災上の課題を改善していくとともに、災害対策本部の施設整備、資機材・備蓄品の購入等にも取り組んでいく予定です。

▼今年度実施した防災訓練一覧

5月	自衛消防・防災隊本部訓練
7月	自衛消防・防災隊地区隊訓練
8月	災害対策本部訓練
10月	防災センター訓練
11月	災害対策本部訓練、自衛消防・防災隊本部訓練・地区隊合同訓練、防災センター訓練、エネセン訓練、B6病棟訓練、総合防災訓練

※なお、この他にも病棟ごとで独自に防災訓練が行われています。



自らを守る訓練(エネセン2階)



屋内消火栓を用いた消火訓練(大学本部棟3階)



6人がかりで1人を担架搬送(B病棟6階)



病棟ではアクションカードに基づいて活動(B病棟6階)



約30メートルの高さからロープ1本で降下



C病棟8階ベランダにいる模擬患者を救助



訓練検証会の様子(厳樞会館3階)



訓練全体を振り返り理事長よりコメント

リレー・フォー・ライフ・ジャパン奈良に参加しました

財産管理課 課長補佐 中西 一郎

●「リレー・フォー・ライフ」とは？

財団法人日本対がん協会とリレー・フォー・ライフ・ジャパン奈良実行委員会が主催し、がん征圧を目指し、がん患者や家族、支援者らが夜通し交代で歩くチャリティイベントです。1985年にアメリカの医師が「がん患者は24時間闘っている」というメッセージを掲げて、24時間走ったのが始まりです。本学もその趣旨に賛同し、後援を行いました。

10月19～20日、奈良では初めて県立榎原公苑陸上競技場で開催されました。(本学も後援しています。)

日頃、駅伝大会出場や登山活動をしている学内のスポーツクラブ“飛鳥川ランナーズ”チームで、このイベントに参加しました。

●サバイバーウォークに始まり…

正午12時のオープニングセレモニーに続き、がん患者(サバイバー)によるサバイバーウォーク、その後は参加各チームが競技場のトラックをRun & Walkします。私たちも自家製のタスキをつないで走り(歩き)ました。競技場内の仮設ステージでは、他にもフォークソングやゴスペル、フラダンスなど多彩なステージイベントが



サバイバーウォーク

開催されています。

本学医療サービス課の福井課長も奈良フォークソング愛好会のメンバーとして参加され、今回の奈良大会のオリジナルソングや懐かしのフォークソングなどを、約1時間にわたり披露されました。

●夜からは雨となり…

特に夜半からは激しい雨となりましたが、深夜にも関わらず、交代で駆けつけてくれたメンバー(延べ約30人)でタスキをつなぎ、24時間完走(完歩)できました。

●(ついでに)メンバー募集

飛鳥川ランナーズでは、一緒に駅伝大会やマラソン、登山などの活動をするメンバーを募集しています。

加入資格は「奈良医大に勤務している」こと。年齢、性別、経験不問。興味のある方は下記まで。

財務企画課：石田(内2376)
財産管理課：新後(内2283)

★今回の出場にあたり、吉岡理事長、古家病院長、大西理事等よりご支援を賜りました。ありがとうございました。



公開講座『くらしと医学』開催のお知らせ

平成 25 年度後期公開講座『くらしと医学』を下記のとおり開催します。
申込み・受講料共に不要ですので、皆様お誘い合わせの上、ぜひご聴講ください。

日時：平成 26 年 3 月 1 日 (土) 13 時 ~ 15 時 30 分
場所：なら 100 年会館 大ホール (奈良市三条宮前町 7-1)

プログラム：

● **病理病態学 教授 小西 登**
「がんの病理診断と治療への関わり」

概要：がんは今や日本人の 2 人に 1 人がかかり、死因の第 1 位に挙げられる国民病です。がんの最終診断は病理組織診断によってなされますが、現在では単なる診断にとどまらず、がんの治療薬の選択や外科的治療にも病理診断が欠かせません。近年のがんの傾向やさまざまながんの治療に関わる診断の重要性を中心に講演します。

● **輸血部 教授 藤村 吉博**
「献血された血液による輸血医療の実際」

概要：日本赤十字社の献血事業はよく知られていますが、これら献血された血液の用途は様々で、一般にはあまり知られていません。本講演では、献血血液は一般採血あるいは成分採血の後、詳細な品質管理検査が実施され、赤血球製剤や血小板濃縮製剤が作成される事、また、一般にはなじみが少ないですが、液体成分である血漿は、劇症肝炎や血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) という血液難病で、血漿交換に使用され、またアルブミンや血友病の治療製剤等に加工されます。これらの事例について紹介したいと思います。

● **耳鼻咽喉・頭頸部外科学 教授 細井 裕司**
「どうして聞こえない？ どうしたら聞こえる？ ~聞こえのための奈良医大発の新発見と補聴器・スマートフォンへの応用~」

概要：人は耳の病気が加齢で聞こえが悪くなることがあります。どうして聞こえが悪くなるのでしょうか。まず、聞こえのメカニズムを理解していただきます。次いで、耳の病気の話、その治療の話をしていきます。最後に、2004 年に私が発見した新しい音伝導経路を用いた世界で初めての軟骨伝導補聴器について、またスマートフォンへの応用など最新の情報を提供します。

<http://www.naramed-u.ac.jp/info/openlecture.html>

レポート

第 17 回 役員会 (10 月 2 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
 - (2) 奈良県立医科大学学位規則の改正について
 - (3) 平成 25 年度講座・教員研究費等の下半期の配当について
 - (4) 学長選考会議委員の選考について
 - (5) 職務発明等の認定、権利の承継、外国出願の可否等の決定結果について
 - (6) 外国人客員研究員の受入れについて
- 2 ハラスメントの防止等に関する規程の運用について再発防止策を明記する等一部改正を承認
- 3 平成 26 年 4 月 1 日採用予定の看護職員採用試験において 8 名の合格者を決定
- 4 新病棟 (E 病棟) 1 期竣工に伴う内覧会を 11 月 1 日に開催することを報告
- 5 10 月 1 日付け桑原准教授の形成外科センターセンター長として病院長発令を報告

第 8 回 教育研究審議会 (10 月 3 日)

- 1 教員の人事について、10 月 31 日付け退職、11 月 1 日付け昇任、11 月 1 日付け、26 年 4 月 1 日付け採用、11 月 1 日学内配置換えを承認
- 2 教員 2 名の女性研究者支援センターコーディネーターの兼務発令を承認
- 3 空席となっていた学長選考会議委員 3 名を決定
- 4 学位規則の一部を改正する省令の施行等に伴う奈良県立医科大学学位規則の改正を承認
- 5 平成 25 年度講座・教員研究費等の下半期の配分を承認
- 6 職務発明等の認定、権利の承継、外国出願の可否等の決定結果を報告
- 7 中国から客員研究員 1 名の新規受入れを報告

第 18 回 役員会 (10 月 16 日)

- 1 県費奨学生配置センター設置に関する県との協定書の締結等を承認
- 2 平成 26 年度の県に対する予算要望を承認
- 3 平成 26 年 4 月 1 日採用予定の職員採用試験において臨床検査技師 5 名、診療放射線技師 2 名、薬剤師 6 名、臨床工学技士 2 名、視能訓練士 1 名、理学療法士 6 名の合格者を決定
- 4 平成 25 年度の財務状況 (8 月末現在) を報告

- 5 弘済団売店がコンビニに転換されることを報告
- 6 電子カルテについて国ガイドラインに則った取扱いとすべく総合医療情報システム運用管理規程の改定を報告
- 7 特定共同指導に係る改善報告を報告
- 8 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 特別共同研究助成事業及び若手研究者助成事業の採択結果について

第 20 回 役員会 (11 月 6 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
 - (2) 任期制教員の再任審査について
 - (3) 情報セキュリティ委員会規程の制定について
 - (4) 大学機関別認証評価に係る訪問調査について
 - (5) 外国人客員研究員の受入れ期間変更について
- 2 県民の健康増進支援センター設置に向けた運営委員会規程の制定を承認
- 3 定年退職職員の再任用規程及び高齢者の雇用に関する取扱いを承認

第 10 回 教育研究審議会 (11 月 7 日)

- 1 教員の人事について、10 月 31 日付け退職、12 月 1 日付け昇任、11 月 1 日付け採用を承認
- 2 12 月 31 日付けで任期満了となる任期制教員のうち再任申出のあった准教授 1 名、学内講師 1 名、助教 1 名の再任を承認
- 3 情報セキュリティ対策に関する重要事項の決定のための情報セキュリティ委員会規程の制定を承認
- 4 臨床教授 1 名の選考を承認
- 5 特別共同研究助成事業の採択 2 件及び若手研究者研究助成事業の採択 4 件を報告
- 6 中国からの客員研究員の受入れ期間の変更を報告

第 21 回 役員会 (11 月 13 日)

- 1 平成 26 年度予算編成方針の骨子等を承認
- 2 平成 25 年度決算見通し等を報告

第 22 回 役員会 (11 月 20 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
- 2 国から委託を受けた題解型医療機器等開発事業実施のための専門的見地から助言等を行う研

究推進委員会の設置を承認

第 23 回 役員会 (12 月 4 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
 - (2) 任期制教員の再任審査について
 - (3) 県費奨学生配置センター規程の制定について
 - (4) 第二期中期計画及び平成 25 年度計画の上半期取組状況等について
- 2 事務職員採用試験において 6 名の合格者を決定
- 3 看護職員採用試験において 17 名の合格者を決定
- 4 情報システム運営委員会委員の学長指名委員選任の報告
- 5 弘済団がローソンと契約を結び売店をコンビニ化することの報告
- 6 (旧) 看護師宿舎の名称をスキルスラボ棟に変更することを報告

第 11 回 教育研究審議会 (12 月 5 日)

- 1 教員の人事について、12 月 31 日付け、2 月 28 日付け退職、1 月 1 日付け昇任、1 月 1 日付け採用を承認
- 2 1 月 31 日付けで任期満了となる任期制教員のうち再任申出のあった助教 2 名の再任を承認
- 3 県費奨学生配置センター規程を制定し、運営体制等を整備することを承認
- 4 第二期中期計画及び平成 25 年度上半期の取組状況等を承認

第 24 回 役員会 (12 月 18 日)

- 1 教育研究審議会予定案件を承認
 - (1) 教員の人事について
- 2 退職手当規程を整備し、定年前早期退職者に対する割増率を改正することを承認
- 3 平成 25 年度の財務状況 (10 月末現在) を報告
- 4 2 月 1 日、2 日に実施する医学科推薦選抜試験の出願状況を報告

第 12 回 (臨時) 教育研究審議会 (12 月 24 日)

- 1 第一生理学 山下教授の平成 26 年 2 月 28 日付け退官に伴う教授選考にかかる教室員からの意見聴取を実施

メディア掲載情報をお寄せください～学報紙面で紹介します～

新聞・雑誌・テレビ等マスコミの取材、テレビ出演、記事を掲載された教職員・学生をこの「学報」紙面で紹介します。

掲載者	掲載メディア	掲載概要
小山 文一 准教授 (中央内視鏡・超音波部)	読売新聞 朝刊 10月6日(日)	炎症性腸疾患(潰瘍性大腸炎・クローン病)という難病に対して、内科的治療も外科的治療も一手に引き受ける消化器外科の取り組みを【病院の実力】で取り上げていただいた。最新の薬物治療と腹腔鏡下手術を中心に紹介した。
今村 知明 教授 (健康政策医学)	【NHK放送局】NHK ニュース 10月15日(火)	「生レバー提供の飲食店検挙」を取り上げたニュースの中で、牛のレバーを生食用として販売・提供することが禁止された後も裏メニューとして提供されていることについて専門家としての意見を求められ、食中毒の危険性を解説するとともに生レバーの提供をやめるべきだとコメントした。
岡本 左和子 助教 (健康政策医学)	毎日新聞 朝刊 医療面(全国版、原則毎週木曜掲載)・ 医療リレーコラム執筆、毎月第1週担当	楽しそうに見えて、ダンスはお互いが自分のパートをしっかり受け持たないと踊れない。フルーツを踊るように、医療従事者と患者さん・家族双方が各自の役割を果たしながら医療のパートナーになっていただけることを願って、双方の思いの紹介やお互いの努力と工夫の提案、米国での経験と医療事情などを取り混ぜたコラムを書いている。
大崎 茂芳 特任教授 (皮膚科)	関西テレビ『特ダネ』 毎日放送MBSラジオ『ノムラでノムラだ』EXトラJ 日本経済新聞 朝刊 毎日新聞 夕刊	コラーゲン線維の研究の傍ら、35年以上にわたってのクモの糸の研究に携わってきた。その過程におけるクモ相手の苦労話、クモの不思議な挙動や糸に対する数々の新しい発見に関する話に加えて、糸の医学への応用を含めた実用化への期待の話等について解説を行った。
石井 均 教授 (糖尿病学講座)	産経新聞 朝刊	「専門医に聞く糖尿病」のタイトルで、病態と治療法を説明する患者さん向けの記事。「正しく治療を継続し、それに見合う効果を得よう」、「血糖、血圧、コレステロール、体重をコントロールして、QOLと健康寿命を保とう」と呼びかけた。

学報バックナンバーは web サイト上でもご覧いただけます。

(<http://www.naramed-u.ac.jp/info/introduction/magazine.html>)

地域掲示板

みなさん、お気づきですか？

なかよし保育園やゲストハウスの前に花のプランターが置かれているのはご存じでしょうか。実は、近くにある「フラワーショップおかもと」さんがご厚意で四季折々の花を置いて頂いているのです。

なんだかうれしいですね。最近そこを散歩コースに入れ、花を愛でながら、心和むひとときを過ごしています。

普段何気なく通っている道にもこんな小さな幸せがあります。

仕事、仕事、仕事…忙しい時だからこそ、心にゆとりを持ち、ひとときの幸せを見つけてみませんか。

ほら、あなたの周りにも幸せが落ちていますよ、きっと…。

「フラワーショップおかもと」さん、幸せをありがとうございます。

編集後記

「和食」がユネスコの世界の無形文化遺産に登録された。

対象はこの料理、あの料理というのではなく「自然の尊重という日本人の精神を体現した食に関する社会的習慣」だそうです。懐石料理や鮎だけでなく、家庭料理や郷土料理も含まれるのであろう。喜ばしいことですが、日本が経済のみならず食生活までもグローバル化し、それを遺産として登録することに意義があるとすれば、皮肉なことでもあります。「文化」や「伝統」とは、一つの解釈としては一つの社会が共有するアイデンティティ(言語、宗教、価値観など)を指すといえます。人間でいうと人格そのものでもあります。新年を迎えて奈良医大の文化や伝統を良い方向に育んでいきたいものです。

○岸本 年史(精神医学) 橋本 顕子(精神看護学) 吉田 一良(病院管理課)
藤本 雅文(物理学) 堀口 陽子(看護部) 森田 英之(総務課・広報室)
笹平 智則(分子病理学) 藤谷 威行(研究推進課) 植松 聡(総務課・広報室)
藤本 正男(内科学第三) 永井 淳(教育支援課) (○印は編集委員長)